

---

# 神田リュウジと異界の事情～経津丘高校の日本神道～

明鏡院ワタル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神田リュウジと異界の事情〜経津丘高校の日本神道〜

### 【Nコード】

N1078R

### 【作者名】

明鏡院ワタル

### 【あらすじ】

春風の駆け抜ける四月、関東と甲信越の境に位置する経津丘市へと転校した神田リュウジ。

放課後に出会ったのは、首なしの亡霊たちと、心霊研究部を名乗る少女たちだった。

がむしゃらに幽霊騒ぎを解決しようとするお嬢様、金剛院花梨

「あなた、わたくしを侮辱しましたわね！」

はんなり京都訛りの和風美人、高坂綾子

「よろしゅう頼みます」

そして見栄っ張り部長、三条紀明

「ようこそ、経津丘高校心霊研究部へ」

この出会いが、街の平和へと繋がっていく。

戦国の怨念渦巻く経津丘市の怪事件に、リュウジと心霊研究部が挑むのであった！

民間伝承、神話、歴史など幅広く設定に取り入れておりますが、物語の都合で脚色を加えられていたり諸説あるうちの一つを採用したり、作者なりの解釈やキャラクターが与えられていたりします。

E エブリスタ、モバゲータウンでも公開中。

感想など、お待ちしております！

## 第一章

その場所はリュウジの予想に反して静まりかえっていた。

いや、扉の前に立ち、何の物音も聞こえなかった時点で大方の見当はついていたのだが。それでもこうして実際に中を覗き、現実を知った瞬間のショックは大きかった。

「お、俺の剣道生活が……」

剣道場の入り口で、ぼうっと立ち尽くすことしかできない。

自分の中のいろいろなものが、からっぽになった気がした。

剣道の名門として知られてきたふつおか経津丘高等学校。

中学の頃からずっと憧れてきたその道場はさぞ活気があって、強い選手たちと交流できる場所なのであろう。というリュウジの希望はほぼ完全に崩壊した。

正面に神棚を有し年季の入った板張りの床が続く、バレーボールのコートひとつよりも少し広めの道場。

大勢の剣道部員で賑わうであろうと想像していた放課後にここに来てはみたものの、誰一人としてそこにはいなかったのである。

「なんのために、わざわざ転校までしたんだよ」

剣道場特有の、剣士たちが流す汗臭さは鼻に伝わってはこない。

かわりにうつすらとカビの臭いがする。ここ数ヶ月のあいだ、掃除さえされていないのだろう。

換気のために大きくとられた窓から差し込む四月の日差し。外は暖かそうだがまだ室内の空気はひんやりしていて、そこにこのかび臭さが加わるといかにも『見捨てられた』場所のように思えてくる。

窓のある方とは反対側の壁にびっしりと飾られた賞状やトロフィーが、過去の栄光を寂しそくに物語っていた。

静けさに水をさすように、横からガラガラと更衣室の戸が開く音が聞こえてくる。

「あれ、もしかして見学の人？」

一人、小柄な男子生徒がそ言いながらこちらに向かって来るのを確認した瞬間、希望が生まれた。

柔らかい微笑と優しそうな口調。新入生を勧誘する現役部員のそれっぽい。

「ああ、そうだ。俺は神田リュウジ、二年生だ」

「お、やる気まんまんだな。てか転校してきたのって君なんだ」

熱のこもった視線に気圧されたように男子生徒は一瞬表情を硬くした。いやな予感がする。

「あ、いや……張り切って来てくれたところ悪いんだけどさ、見ての通りこの剣道部って廃部寸前なんだ」

「やっぱり、そうなのか」

すでに予想はしていたとはいえ、こうして直接言葉で言われてしまつとたまらない。

とはいえ、こうして部員らしき人物を発見できたのだ。何か聞けるかもしれない。

「なあ、お前はここの部員なんだよな」

「まあ、一応」

男子生徒は若干頬を引きつらせながら曖昧な返事をした。

「その、あれだよ。卒業していった先輩たちはみんな経験者で強かつただけど、今の三年生も、僕ら二年生もみんな初心者だったり、経験者なのにここの厳しさについていけなかったりしてね。」

登録人数そのものはそれなりにいるんだけど、実際に活動をしているやつはほとんどいないのさ」

「もうちょっと詳しく聞いてもいいか？」

「お、怒らないで聞いてくれよ。君って卒業していった先輩たちみたいな目つきをしているからさ、こういう話はしにくいんだよ」

どうやら無意識に相手を威圧していたらしい。

身長175センチ程度のリュウジに対し男子生徒は160センチ

くらいのようだし、見るからにおとなしそうな彼にとって、大会をいくつも制覇してきた剣道部の先輩たちはいろいろな意味で恐怖だったのだろう。

いかにも「剣道やります」と言わんばかりのリユウジに、厳しい先輩たちの姿が重なったのかもしれない。

「す、すまん」

「へえ、君は先輩たちと違って、意外と話せそうだな」

無理やりながらも表情を和らげたりリユウジを見て、小柄な男子生徒は少し安心したようだ。

「ほらさ、去年の夏までこの部って、休憩はほとんどないし学校閉まる時間のずっと後まで活動時間が長引いたりとかして、辞めたり来なくなったりする部員が続出していたんだ。熱心とか真面目とかいう評価を通り越して、下校時間や下級生の問題で生徒指導部の先生たちに目をつけられるくらいにね。頑張るのはわかるけど初心者置いてきぼりみたいな感じで、時代錯誤だろう。」

でも、夏のインターハイが終わって先輩たちが引退したあたりからぼつぼつと復帰し始めた生徒もいるよ。ま、息抜きに個人練習……おっと、稽古をしたりサボる場所にしたりってところかな。残念ながら、集団としての機能はほとんど失われているよ、この部活」

「インターハイか、俺も出たかった……」

男子生徒が練習という単語を慌てて『稽古』という武道の専門用語に置き換えたことから、先輩たちの厳しい指導は用語のひとつひとつに至るまで行き届いていたのであろうことがうかがえる。

それほどまでに熱心な活動が行われていたというのに、自分がこの場所の門をくぐった今はもうそうではなくなっていた。

リュウジは自分の運のなさにがっかりとうなだれる。

「そ、そんなに気を落とすなって。ほら、キツいのはさすがに無理だけどね。ここでサボるときの話し相手とか、ちょっとした稽古の相手くらいなら僕も付き合うよ」

高校剣道界を賑わせた優秀な選手のほとんどが卒業してしまった今となってはすでに、剣道部員であるメリットは『道場という名の休憩所を使う権利』程度のものらしい。

この学校で真剣に剣道をすることは、もはや無理なようである。

「仕方ないこと……なんだよな」

「ま、世の中我慢できたもん勝ちだよ」

男子生徒は愛想笑いを浮かべたまま、リュウジだけでなく自分自身にも言い聞かせるように呟いた。

「我慢　　つてお前、今放課後になっただけだからなんだが、まさか」

「うん、朝からずっとこの更衣室でサボタージユだよ」

「いいこと言ったように見せかけて、全然ガマンなんかできてねーじゃねえか」

「まあまあ。ここは『そういう所』なんだよ」

「お前の先輩たちが厳しかった理由、なんとなくわかったわ」

こんな環境ではどうあがいても剣道に集中できそうにない。

むしろ道場で稽古なんかしていたら、更衣室で漫画を読んだりゲームをしていたりする奴らからうるさいと抗議がきそうなくらいだ。

「はあ、ついてねえ」

「大丈夫だって。ほら、さっきも言ったように軽い稽古くらいなら付き合うし、大会なら個人戦に出ればいいじゃん」

「お前って、意外とマシなやつなのかもな」

「もう他の皆は、ほぼ退部したか道場に来ないかだからね。でも僕はこの部活が続いて欲しいって気持ちが少ないだけある。勧誘活動とかもしてなくて一年生も来ないけど、君が来てくれて安心したよ」

「お前……」

リュウジの目頭がわずかに熱くなった。転校初日から、こんな友情が芽生えるなんて。

インターハイだなんて贅沢はもう言わない。ここにはとりあえず一緒に剣道のできる仲間がいるのだ。

「だってこの部活なくなったら、ここの鍵の貸し出しが難しくなるからね。せっかくのサボリスポットがなくなっちゃうよ」

「……少しでも期待した俺が馬鹿だった」

やっぱり大失敗だ、この転校。

これから卒業までの二年間、どうやって過ごしていこうか。

ガラガラと音をたてて崩れ落ちた剣道への熱意と高校生活のプランのかけらを拾い集める気には、とてもなれない。

「そつだ。確か君、転校生なんだよね」

「ああ？」

部活ライフ断絶を余儀なくされて落ち込むリュウジ。

しかし、そんなリュウジにはおかまいなしに、男子生徒はいたずらっぽく語りかける。

「どこから来たの？」

「……東京」

彼のテンションについていけないリュウジはぶっきらぼうに返す。

「そうなんだ。ここ、田舎だけど楽しくやっていけそう？」

「剣道をまともによれりゃ、俺は田舎だろうが構わんぞ」

関東と甲信越の、ちょうど境に位置するこの経津丘市。

東京に比べれば、たしかに田舎という肩書きにはなるだろう、地方都市だ。

「実は今、ココはホットな噂があつてね」

やっぱりリュウジにはおかまいなしな男子生徒。

「昔からさ、この街って出やすいんだ」

「なにがだ？」

ついに根負けし、リュウジはしぶしぶ男子生徒の出す話題に乗ってみる。

面倒ではあるが、これも処世術だ。

目を輝かせて男子生徒は話しを続ける。

「ゆ・う・れ・い」

「そ、そうなのか」

とは言え、やはり興味を持つことができない。

リュウジは、それは大変だなどと適当に話を合わせて、剣道場を去ることにした。

住宅街の景色に高い建物の影はなく、延々と民家ばかりが連なっていた。

どこか買い食いのできそうな店でもないかと、リュウジはまだ慣れない通学路を歩いていく。

「はあ、まるで砂漠だ。アスファルトと家の砂漠だ」

東京から引越してきたリュウジにとっては、歩いていて十分おきくらいにはコンビニがあることが普通なのだが。

それは地方都市である、この経津丘市には通用しない常識なようだ。

「せめて自販機でもありゃいいんだがな」

軽く肩をすくめるも、目の前には車二台がギリギリですれ違つてとができる程度の細い県道と、二階建ての住居ばかりが広がっていて、喉を潤すことも腹を満たすことも、当分できそうにはなかった。

どこからか掃除機の音や赤ちゃんの泣き声が聞こえてくる。そしてそれらの音に混じって、わずかに漂ってくる料理の匂い。

「まだ夕飯には早いだろ。腹減ってる俺へのいやがらせかっつーの！」

春の陽気が真っ黒な学生服に染み渡り、下に着たシャツを汗ばませていく。

剣道の稽古を通して蒸し暑さには慣れているはずなのだが、気分が落胆しているところの程度でも辛くなってしまうのだろうか。

制服のボタンを三つほど開けて、空気を入れようとシャツをバタバタと前後させてみる。

「ふう、なかなか涼しくなってきた　ってアレ？」

シャツと胸板の間に流れ込んできた空気は、まるで冷房から出てきた風のように冷たかった。

汗が一瞬で引き、体がどんどん冷えていくのがわかる。

ついさっきまで蒸し暑さに苦しんでいたというのに。

それだけではない。周囲が妙に静かすぎるのだ。

さっきまでは遠くを車が通る音がしたり、民家から夕飯の下ごしらえや洗濯物を取り込む時の音がしていたというのに、今は生活の気配を全く感じない。

うるさいほど聞こえてきた子供の声や、食欲をそそる料理の匂いも、今は感じる事ができないのだ。

息づかいを失った街は、自分がそれまでとは全く違う空間に放り込まれたかのような心地にさせてくる。

「おいおい、嘘だろ」

周囲を見渡すも、付近には自分以外に誰かが居る様子はない。

不気味な静けさに包まれた街に、ぼつりと自分だけが取り残されている。

リュウジは背筋に何か冷たいものを感じた。

想像もつかない、得体の知れない現象に巻き込まれているんじゃないか。理屈ではなんとも言えないが、動物的な勘がピンピンとそれを伝えてくる。

急に気温が下がったのは、ちょっと太陽が隠れたせいなのだろう。リュウジは上空を見上げた。そう、雲に包まれた太陽と青い空があるはずだ。

しかしそんな期待に空は応えてはくれなかった。そこには雲も太陽も、垣間見える青空もなかった。

ただ、真っ白なだけ。

心臓は早鐘を打ち始め、全身を先ほどとはまた違った汗が舐めだした。

「やべえ。なんかやべえぞ」

さらに目を凝らせば、白紙の空は陽炎のようにわずかに揺らめいている。この異常な光景に、心臓の動きがどんどん加速していくのを感じる。

一刻も早くこの場所を去らなければ。リュウジはごくりと唾を飲

み込むと一目散に走り始めた。

走り始めてすぐに、視界の隅に真っ赤な郵便ポストがよぎった。

印象に残ったものはその程度で、その後はただでさえ無機質な住宅街の景色が延々と続く中を走り抜けていくだけだった。

「クソッ、どうなっているんだ」

二百メートルほど全力疾走してみたものの空模様は相変わらずで、走って熱くなつたはずの体が急速に冷めていくほどに空気の冷たさもそのままだった。

膝に手をつけて荒く息をするリュウジを嘲笑うかのように、真っ白な空はユラユラと蠢いている。マジかよ、とリュウジは眉をしかめた。

朝に一度通っただけの通学路。そのため現在地がどこであるのか、家までどの程度距離があるのかもわからない。

やってきたばかりの街はまるで迷路で、この異常な天候と寒気、そして人気のなさは、もはや人間の住む領域を超えた『どこか』に迷い込み、そこに閉じ込められたかのような絶望感を与えてくる。

そういえば、子供の頃は旅人が狐や天狗のいたずらに悩まされる昔話をギャグのように聞いていたな。

自分自身の身に異常現象が降りかかった時という最悪のタイミングで、ピンポイントに脳はその記憶を引っ張り出してくる。

まさか自分が今こうして迷っているのは、物語に登場した天狗を馬鹿にしたせいなんじゃないかなどと知らない思考がまわり、さらに不安がこみ上げてきた。

アスファルトやブロック塀ばかりが映る味気ない視界の隅に、鮮やかな朱色が顔を覗かせている。リュウジはほぼ無意識にそちらの方を注目した。

郵便ポストだった。

「そついえば……さつきも！」

確か走り出す直前にも郵便ポストを見かけたはずだ。そしてポスト同士の距離がたかだか二百メートルおきだなんて近すぎる。

リュウジの中に一つの疑いが生まれた。

まず慎重にポストを確認する。自分自身の位置から見て向かって右にあり、ポストの後ろにはブロック塀が立っていて、根元には雑草が生えていた。

これらの条件を念入りに記憶し、リュウジはもう一度走り出す。

「嫌な予感が、当たらないといいんだけど」

ありえない予想であることも、常識的に考えて馬鹿げた実験であることも承知で、必死に足を動かした。

ただでさえ自分の理解を超えた状況にいるのだ、把握できることがあるのなら把握しておきたい。

静寂を、自分の足音と心臓の鼓動が裂いていく。

そしてその心臓から送り込まれるエネルギーを受けて、普段よりも激しく駆動する身体。

疾走する速度が落ちていったのは、視界の先にあの鮮やかな朱色が飛び込んでからである。

「やっぱりか」

唯一の目印だったポストが再び目の前に現れた。そうならば、もはやこのような結論をださざるをえない。

「俺は同じ場所に、戻ってきているんだ……」

道をまっすぐに走っていたはずが、無意識のうちにUターンしてここに戻ってきていたのだ。

走り出す前に向かって右にあったポストは、今は反対の左に確認できる。

周囲の状態と照らし合わせてもここは走り出したあの場所に間違いなく、変わっているのは自分自身の向いている方向だけである。

リュウジは自分が理解の及ばないところに閉じ込められてしまったことを、理解できないなりに理解した。

いつの間にか両手が制服の裾を握り締めている。気休めにしかならなかったとしても、少しでも恐怖を和らげればと思い、そのまま

握り続けた。

荒い息づかいと暴れる心臓。そして物音ひとつたない町並みが、この世界には必死になっっている自分ひとりしかいないということを、執拗に伝えてくる。

深々と雪が降り積もる冬の夜のように、音という概念が消えた世界。

がさり、がさり……

そう思った矢先、小さな音が聞こえた。

「誰か、居るのか？」

独りはいやだ。こんな意味のわからない場所に独りきりなんて耐えられない。リュウジはその、足音らしきものが聞こえた方向へ走り出した。

ちゃんと人の気配がする。リュウジは小さな路地へと続く枝道へ身を翻した。

近づけば近づくほど、物音ははつきりしていく。どうやら向かう先にいるのは一人ではなく、ある程度の集団のようだ。足音が複数聞こえる。かちりと金属的な音もした。

路地裏は建物の影によって薄暗く、じめじめとして気味が悪かったが、先ほどまでの異様さと比べればはるかにましだ。

そして他の誰かに会えるかもしれないという希望もある。平気で

抜けることができた。

隣りの通りに出ると、天から曇り空のようにつすぼんやりとした光が差しているのがわかる。

「おーい、誰か……」

予想通り、いくつかの人影が見える。だがその異常な風体にリュウジは絶句した。

「う、嘘だ。何なんだよこいつら」

その五人ほどの集団は、時代錯誤で奇怪な格好をしていた。

「……」

がさつに身に付けられた胴鎧。腰に提げた刀。むき出しの腕や足は妙に青ざめていて生気を感じない。そして何より、彼らには首がなかった。

落ち武者のようなそいつらは、ユラユラと重たい足取りで辺りを巡回している。生前組んでいた隊列を懐かしんでいるのだろうか。

いびつなその動きは、彼らがこの世の法則を越えて動き続ける亡者であることを明確にしていた。

がちやり、がちやり……。

彼らが一步足を踏み出すたびに、腰の武器と鎧が不気味に響く。

「や、やべえ」

「！」

思わず漏らしてしまったその一言に、ぱっと首のない落ち武者たちが反応する。

それぞれが武器の柄に手をかけ、その切っ先をリュウジへと向けた。

錆びたり欠けたりしているとはいえ、放たれる殺気の鋭さはリュウジに冷や汗をかかせ、足を動かなくさせるには十分だった。

いや、むしろ錆びた刃は磨きぬかれたそれよりも禍々しく、悲しい恐怖を与える存在だった。

足がすくんで動けないなんてみっともねえ。

そんなことを考えている場合ではないと知りながらも、リュウジはその場に立ち尽くすしかなかった。

がちやり、がちやり……。

亡者たちの重い足取りは人生のタイムリミットを告げる時計の音。

彼らの武器の間合いに入れば、自分が八つ裂きにされることは明白だ。

「ちくしょうなんだ。なんでよりによって俺なんだよ」

意味のわからない空間に閉じ込められたあげく、武士の幽霊に集団リンチされて人生終了なんて理不尽すぎる。俺が何か悪いことでもしたか。

行き場のない憤りが起こりつつも、すでに全身の血の気は失せ、足に力が入らない。

刃を振り上げてゆっくり近づいてくる異形の集団は、すでにメートルほど手前にまで迫っていて……。

「ようやく見つけましたわ。覚悟なさい！」

少女の金切り声と爆発音に耳を裂かれながら、リュウジの意識は遠のいていった。

長い廊下が続いている。

剣道場のような板張りの床。壁には数メートルおきに神棚や飾り物の刀剣。

人ふたりがようやくすれ違うことができる程度の細い廊下がずっと続いているようで、前後とも先は闇に覆われて見えない。

よく見れば神棚には小さな灯籠が設けられており、その仄かな明りが現在地を照らしているようだ。

妙に澄んだ空気が漂っており、不思議と気分が安定してくる。

「おいおい……」

いつのまに気を失っていたのだろうか。

リュウジはゆっくり起き上がると、自分がこの不思議な回廊に寝ていたことによく疑問を持ち始めた。

「まさかこの先は天国、とかじゃないだろうな」

「フッフ、その心配は不要だ」

リュウジの背後から、やや低めの青年の声がする。

「ここはお前の思念の領域。平たく言うなれば、夢の中ぞ」

振り返ると、そこには平安時代の絵巻物から抜け出してきたような武者がひとり。

先ほど謎の空間で出会った落ち武者たちとは違い、彼は立派な大鎧で全身を覆っていた。

「リュウジよ、我を忘れておるようだな」

「……」

口元を片方だけつり上げて不敵に微笑む平安武士。彼の切れ目は真っ直ぐにリュウジを捕らえていた。

その一方で、いかにも「寝起きです」と言わんばかりに呆けた顔のリユウジ。

「フフフ、その様子では二重の意味で『我』を忘れておるなあ。フハハハハ！」

「安心しろ。俺は俺自身のことも、マサのことも忘れちゃいない。そしてダジャレが寒い」

この笑い上戸の亡霊、マサをリユウジは知っている。

一言で言うなればリユウジの剣の師匠。幽霊として与えられた悠久の時間の一部をリユウジの稽古に使っている。

リユウジの実家は神社である。

その神社ではとある武神を祀っているようで、その武神に奉納試合 要するに武神に見せるための試合 を行う道場に住み着いている霊が、このマサである。

神聖な神社に亡霊なんていうのもおかしい話だが、もう何百年も前から住み着いているようで、すっかり神田家の一員と化している。

転校し、一人暮らしを始めて以来の再会だ。

「まったく、あの程度の者どもを見て驚くとは。我と稽古をしておれば、あれくらいなんともなかるう」

「いや、フツーにやばいだろあれ。首ねーんだぞ」

リュウジを鼻で笑うマサに対し、リュウジは少しムキになって返す。

剣の師匠であり家族であるマサは、いかに大時代な格好をしているようにリュウジの中で幽霊として認識されていなかったのだ。

「フッフ、あの手の者たちが人目に触れぬようにする者たちもまたいるのだがな」

「そんで、ここはどこなんだよ」

「何度も言わせるでない。お前の夢の中だ」

自分自身の夢の中とはいまいちぱつとこない。

「ここが夢なんだとしたら、今のお前は俺の記憶が作り出しているのか？ それとも幽霊ってやつは、人の夢に入れるのか？」

「うむ。両方とでも答えておこう」

「……意味わかんねーよ」

マサは不敵な微笑をうかべたまま、籠手をガシヤリと鳴らして腕を組んだ。

「異界に蠢く妖怪や魔物たちは、人間の作り出した『概念』を通じて人の住まう世界に現れる。我がお前の思念を通っているのは、その応用よ」

「まあ、幽霊のお前が言うなら妖怪だのが存在してもおかしくはな

いけどよ、それにしても話がぶっ飛びすぎじゃね？ もっと科学的根拠ってやつを使って、わかるように説明してくれよ」

夢の中で明確な意思を持った自分がいて、自身の記憶であると同時に現世の本人である存在がいる。

これだけで理解に苦しむというのに、妖怪だの魔物だのといった名前や『概念を通る』などといった言葉を持ち出されても、さらに混乱するだけである。

「フッフ、現実のお前が目覚めようとしているぞ」

「待て、ちゃんと最後まで説明を」

謎の光景もマサの姿も、強い光に包まれて消えていった。

「おーい、おーい」

体が少し揺れた。

意識の大半がまどろみに沈んでいる中、聴覚と触覚だけがわずかに働いているようだ。

「まったくいつまでだらしなく寝転がっているつもりなのでしょう

か。この男は」

真っ暗で何も見えなかった視界が、うすぼんやりと明るくなっていく。

「まあまあ。目え覚ましたら、ゆっくりお話聞きましょう」

「ゆっくり……甘いですわ高坂さん。こんな怪しい相手、油断なりませんわよ」

遠くで少女たちの話し声が聞こえる。

はんなりとした京なまりの艶やかな声と、お嬢様口調のヒステリックな声が、片や日向ぼつこでもしているかのようにおだやかに、片や戦場にも駆り出されたかのように物騒に会話している。

「でも着てはるの、うちの学校の制服どすえ」

「フン！ どうせ地元に紛れ込むための工作ですわ」

「花梨ちゃんは疑い過ぎどす。さっきまでは必死にこの人護ろうとしてはったのに」

「そ、そんなことはありませんわ！ わたくしは」

「あらあ、よう見たらそこそこの色男どすなあ。花梨ちゃんが頑張る理由がわかった気がしましたわ」

「だ、誰がこんな胡散臭い男のためになど。ええいあなた、いい加

減に目を覚まさない！」

「ぐおっ」

脇腹に激痛が走り、視界が一瞬で開けた。

短くひるがえるカーテンのような生地と、すらりと伸びた太ももとふくらはぎのしなやかな脚線美。そしてその奥に垣間見える、小さくレースで飾り付けられた布製の何か。

正体を確かめたかったが、痛みと耳に響く声のせいで、一瞬でパノラマを駆け抜けていった何かを目に焼き付けることはできなかった。

ちなみにそれをじっくり見られなかったのがちょっと残念なことであったとリュウジが認識できたのは、もう少し後。完全に意識を取り戻してしばらくした後のことである。

「ようやく目を覚ましましたわね」

「いてて……」

アスファルトの硬い感覚が後頭部にある。リュウジは痛みをこらえながら上体を起こした。仰向けに寝かされていたようだ。

「無理やりどすなあ」

京なまりの少女が手を差し伸べてくれた。

その手をとって立ち上がってみると、リュウジとそれほど目線が変わらずそれなりの長身であることがわかる。

「とんだ災難どしたなあ。うちは高坂綾子<sup>いっぴか あやこ</sup>。あんさんと同じ経津丘高校の二年生どす」

「ああ、俺は神田リュウジ。なんか助けしてくれたみたいだな」

綾子と名乗った女生徒はどういたしましてと小さく首を振った。

彼女の瑞々しく長い黒髪が揺れる。その長髪に野暮ったい印象はなく、身につけた濃紺のセーラー服の効果もあってか彼女の日本的な魅力を引き出していた。

「神田リュウジ……確か、一組にやってきたという転校生ですわね。幽霊騒ぎが起こり始めたのはこの春から。そして亜空結界にまで侵入してきた。怪しい。怪しすぎですわ」

ヒステリックな方の声がぶつぶつと何かをつぶやくのが聞こえる。

そちらに目を向けると案の定、いかにもお嬢様といった風貌の女生徒が考え事をしていた。

彼女が首をかしげるたびに、ストロベリーブロンドの縦ロール髪がバネのように弾む。

漫画か何かでしかお目にかかれないその髪型に、リュウジは一瞬目を奪われた。

赤っぽい色合いに、くるくると巻かれた毛束。よく冗談でドリル

とか呼ばれるその髪型は、彼に何かを連想させようとしていた。

「まあまあ、まずは本人さんに聞いてみんと」

はんなりと綾子が声をかけるも、少女はうつむいたまま考察を続けるばかりであった。

「亜空に入る霊力を携えているのですもの。無関係である方がおかしいですわね」

まる聞こえの独り言には意味不明の単語がいくつか混じっている。亜空だの幽霊事件だのと現実離れしたものばかりだ。

と、ここまで考えたりユウジは、実際にありえない体験をしていたことをようやく思い出した。

少女たちと出会って人心地がついていたせいだろう、すっかり忘れていた。

空は相変わらず真っ白で陽炎のように揺らいで見えていたが、気温の方は春の陽気に戻っている。

まだ元の世界に戻ったわけじゃなさそうだが、この子たちなら何か知っているのかもしれない。

早速訊ねてみようとしてリュウジが決心したその時、都合よくも縦口ールの少女が話しかけてきた。

「とりあえず、今回の幽霊騒ぎについて知っていることをすべて、洗いざらい話していただきますわ」

すべてという部分が妙に強調されていたが、実のところ何も知らないというのが本音だ。

「ポカンと口を開けて間抜けな顔をしたところで無駄ですわよ。あなたが亜空結界の内部にいるというこの事実こそが、あなたが霊的事件に関与している動かぬ証拠です」

「亜空結界って、この出られない世界のことか？」

「しらばっくれたところで無意味ですわ」

まるで意味がわからずに質問を返してみたものの、縦ロールのお嬢様は依然としてリュウジに疑いのまなざしを向け続けている。

話の内容はさっぱりだが、面倒くさい相手であるということだけははっきりと認識できた。

こちらを、こぼれ落ちそうなくらいに大きなマリンプルーの瞳が睨みつけてくる。

くっきりした顔立ちや目の色からして、ハーフなのだろうか。

はじめに正面から対面していれば第一印象も変わったのであろうが、いまいち見えてこない会話の内容と珍しい髪型のせいで頭が混乱し、はっきりとした人物像を掴めずにいた。

彼女の強い眼力から逃れようと視線をずらすと、ストロベリーブロンドの毛束に焦点が合った。

やはり、見れば見るほど何かを連想させる髪型だ。くるくると巻かれた短めの縦ロール髪。

そういえば俺、腹減ってたんだ。赤茶色のこんがりとした生地。

ここにバターの香りでもただだよっていれば完璧なのだが。と、妙な方向にリュウジの思考は展開していく。

「ちよつとあなた。聞いていますの？」

「そうだ、クロワッサンだ！」

リュウジは確信する。思わず大声をあげてしまった。

「このわたくしを見て、何故パンの名前などが飛び出すのですか」  
たしかに、人の顔を見てパンの名前が出てきては問題だ。しかし今の論点は彼女の後頭部にあった。

「いや、その髪型がな。色といい形といい、マジそっくりじゃね」

器用に短く巻かれ、磨かれた銅貨のように赤く輝くその髪は、心なしかクロワッサンの形に見えなくもない。

だが当然のごとく、少女の表情がさらに敵対心を帯びるきっかけとなる一言になった。

「あなた、このわたくしを愚弄するのですか」

「あ、やっべ」

リュウジは今更になって話をさらにややこしくしてしまったことを悟った。

このクロワツさんが語る『靈的事件』だとか『亜空結界』だとかいった単語の意味や、そこに自分がどう絡んでいるのかわからなければ話は先に進まないというのに。

「いや、そんなつもりはない。とりあえず、話の続きをだな」

「このような屈辱、はじめてですわ。さらに謝罪もせずに流そうとするなんて。まったく言いたい放題に侮辱してくれましたわね」

少女は頭のクロワツサンがこんがりと焼けんばかりに頬を紅潮させて怒鳴りつけてくる。

だが相手の話を聞かずに自分の主張ばかり通そうとする姿勢は彼女とて同じである。

リュウジは話を進めることを半ば諦めて少女に突っかかっていた。

「言いたい放題なのはお前の方だろうが。大体さつきから意味のわからんことばかり言いやがって。お前、新手の宗教か何かに騙されておかしくなってんじゃないのか」

「な、さらにわたくしをコケにするおつもりですわね」

「まあまあ、神田はんはほんまになんも知らんみたいですよ。それに、神田はんもいきなり花梨ちゃんにそんな言ったらあきません」

さすがに険悪な空気を放っておけなくなったのか、綾子が会話に割って入る。

ようやく話がまとまりそうだ。この機を逃す手はない。

「ああ、クロワツサン呼ばわりして悪かった」

「まったく、この後におよんでまだわたくしのことを……あれ？  
素直に謝った」

再び牙をむこうとリュウジを睨みつけていたクロワツさんは拍子  
抜けしたのか、呆気にとられた顔をしている。

「だから、とりあえず状況を詳しく説明して欲しいんだ」

「な、これではまるでわたくしが一人で騒いでいるだけのようでは  
ないですか……まあ、話が穏便にまとまるというのなら、構いませ  
んが」

彼女は斜め下に視線を落としながら少し悲しそうな顔になって言  
った。

言葉は最後の方にいくにしたがってフェードアウトしていつてい  
る。

そのしおらしい姿を見て、意外とかわいいところもあるんだなと  
思ったリュウジだったが、あえて口には出さなかった。

「ほら花梨ちゃん。まずは自己紹介せんとなあ」

綾子にポンと肩を叩かれて、彼女の表情にようやく覇気が戻った。

「わたくしは金剛院こんごういん花梨かりん。同じく二年生です」

「よしよし。ほんで、神田はんはこういう霊的な体験は初めてなんどすか？」

「そうだな。実家が神社だからちよつとした靈感みたいなもんはあるが、この出られない空間　亜空なんたらつてやつか？　とか、襲ってくるような凶暴な幽霊に出会うのは初めてだ。」

この街にも越してきたばかりで、ここの幽霊騒ぎとやらも初耳だ。まるで漫画の中にも入ったみたいだよ」

ついさっきまでたった一人で恐怖と孤独を味わっていたのだ。理解も納得もできない状態なんて早く終わらせたい。

リュウジは期待を込めて二人の少女の返答を待った。

「なるほど。ご実家が寺社仏閣なのであれば、本人に自覚がなくとも強い霊力を伴うことはありますからね」

「この亜空結界言う世界はなあ、ある程度の霊力を持った人しか入れないんです。だから霊力の強い人間と、悪霊や妖怪みたいなんだけが、本来ここに居ることができるんですわ」

つまり、そういう存在とはほぼ無縁の生活を送っていたリュウジは、この空間においてはイレギュラーということになる。

「亜空結界は張った中心から半径一キロを覆い、完全に空間を封鎖します。結界の隅は、行けども行けども戻ってくるようになっているので、さぞ驚かれたことでしょう」

「ああ、人生最大のびつくりだったよ」

「この空間は、言わば現実世界のコピーみたいなもんです。やから一般人は結界に入ることなく、現実のこの場所を普通に通り過ぎるだけなんですわ」

リュウジはその言葉に啞然とした。

要するに結界とやらを張った瞬間半径一キロが亜空に変わり、さらには迷い込んだ人間が気付かない程精巧に空間がコピーされていたというのだ。

あまりにも現実離れた論であったが、体験した後になってはそのうなのだとなんとも納得せざるをえない。

呆気にとられたままのリュウジに向かって、花梨は次に、幽霊騒ぎに関する説明を始める。

「関東甲信越では戦国時代に、北条、武田、上杉、今川といった大勢力が軒を連ねておりました。関東の玄関口であるこの経津丘市はその狭間であり、地元にあった小さな国々が大国同士の争いに巻き込まれて滅ぼされていったと聞きます」

「経津丘に居はったお殿さんは特に抵抗して激しい戦をしたらしくてなあ。昔からこの街にはきょうさん出るんやわ、幽霊が。さっきのも戦国時代の足軽が着るような鎧を着けておりましたなあ」

戦国時代にあった小さな国が滅び、その国の兵士だった者たちの怨念が現代に至るまであふれ出ている。

織田や毛利といった大名は小勢ながら大軍を倒して国土を広げたというが、そのようにうまくいった例は稀で、大抵の小国は大国のされるがままにされたという。

この経津丘市にもそんな歴史があったとは。

「毎年のようにお祓いや鎮魂の儀が行われているようなのですが、この春を境に多くの亡霊が市内に出没するようになりましたわ」

「この春を境に、か」

リュウジはなぜ自分が問い詰められていたのかがようやくわかった。

自分の転校とほぼ同時期に幽霊が大量に現れるようになり、さらにはそんな人物が霊力の高い者にしか入れない結界の中で発見されたのだ。

それで何か関係があるのではないかと疑われたのだろう。

「さあて、こちらはこのへんで失礼しますわ」

綾子はそう言うとポケットから、手のひらサイズの白い固体を取り出した。

リュウジは最初それがコンパクトか何かだろうと思ったが、それ

にはスイッチらしきものと格子のついた小窓がある。消臭用の置物に見えなくもない。

それはちょうどパソコンのデスクトップのようにウィーンとかすかな音を立てている。格子のついた小窓の中には小さなファンが回っているようだ。

綾子が側面にあるスイッチを押すと、空を覆っていた白い雲のような霧のようなものが霧散して、青空が姿を現した。

「結界は解きました。当分幽霊と出会うことはないみたいやけど、気をつけて帰ってなあ」

綾子は笑顔で手を振ると、学校の方へと去っていった。

「さて、わたくしもそろそろもどりますわ」

「あ、待ってくれ」

綾子の方へ向かおうとする花梨をリュウジが呼び止める。

「お前にはまだ言ってなかったな。助けてくれてありがとうよ」

「あなた……」

リュウジの言葉を聞いた花梨は妙に口ごもる。

「初対面の相手と言い争いをしたかと思えば、謝ったり、感謝の意を示したり　　がさつに見えて、意外に器用な生き方をしているよ　　うですわね」

その顔には、笑っているのとも、悲しんでいるのとも違う微妙な憂いがあった。

「そんなあなたが…その…羨ましい、です」

真っ直ぐにリュウジの側を向いていたマリンプルーの双眸が、斜め下に落とされる。

あらわになつた空ではすでに太陽が傾いており、真っ赤になつた日差しが雲の合間から顔を出して少女を照らし出した。

その斜陽によく似たストロベリーブロンドの髪が光を照り返す。

再び彼女の大きな瞳がリュウジを見据え、今度は活発な彼女らしくにぱつと笑い、花梨はきびすを返した。

結界を張つたり幽霊の軍団から自分を救つたりと、一体あの二人組は何者だつたのだろうか。

喉元を過ぎれば熱さを忘れるというが、怪奇現象から無事に帰還してみると自然に興味が湧き、好奇心をくすぐられる。

この街のこと、幽霊たちのこと、不思議な魔術のこと、マサの言っていた、自分自身の夢のこと。

そしてそれ以上に。

もう一度あの二人に会ってみたいと、そう思った。

## 断章

男は疲弊していた。

つい先ほどまで続いていた快進撃が一瞬で、ただ風向きが変わったという一点のために覆ってしまったのだ。

全身を包む鎧は重く、大きな肩当てが押し掛かるように両肩にかかる負担を増やしていた。

自陣の旗色がよかった時は思い切り振るえた武器も、今となつては邪魔でしかない。

一時の油断が　すでに敵は皆逃亡し、戦は終わったのだという勘違いが生んだ敗北でもあった。

ただでさえ少なかった味方は散り散りになり、自分に付き従う兵はごくわずか。

「いたぞ。向こうだ！」

敵兵の怒号と足音が聞こえてくる。

さくりと音をたてて足元に矢が刺さる。自軍の矢を運んでくれていた風が、今度は相手の矢をその流れに乗せて牙を剥いてくるのだ。

それは運命という名の皮肉か。はたまた報いという名の因果なのか。

「お逃げください！　ここは某が」

「否。我がここで退くわけにはいかぬ」

馬上の自分を心配そうに見上げる家臣たちに、落ち着いて言葉を返した。

ここで軍を失っては、遅かれ早かれ自分は殺されてしまうだろう。

ここにいる者たちは、もはや自分自身の一部といっても過言ではなかった。

刃をぎらつかせて迫り来る敵は大軍。

多勢に無勢といった戦を幾度となく乗り越えてきた彼であったが、絶対と思えた勝ち戦がひっくり返った直後。この冷静さが、いつまでもつのやら。

敵味方の前衛同士が切り結び始め、いくつもの金属音と掛け声が周囲にこだまする。

「殿！　あなた様が討ち取られてはなりません」

「わかっておる！　だが退けぬのだ！」

悲痛さえも覚える家臣の懇願に、ついに怒気が漏れてしまう。男はぎりりと悔しさを噛み締めた。

己がもう少し長く自陣に留まっていれば、帰還の途中このような伏兵に遭遇することもなかったろうに。

男が自ら最前線に立たんと手綱を強く握りしめた、その時だった。

「やあやあ、某は<sup>それがし</sup>」

己と同じように馬にまたがり、立派な甲冑を身に着けた武者が名乗りをあげ、猛々しく向かってくる。

武者は前衛の小競り合いを蹴散らすように馬を駆りながら、馬上で弓を引き絞る。

弓は満月のようにしなり、男を貫かんと唸りをあげていた。

この地を護りたい。

まるで経文のように、男の頭の中で反復していた。

そう、ただこの土地を護りたい。ただそれだけなのだ。

「殿！」

家臣たちが叫び、自らの乗る馬がいなくな。

そして、武者の手から矢は放たれた。

## 第二章

燦々と照りつける春の太陽が、朝の冷たい空気を少しずつ暖めていく。

奇妙な体験をした通学路は平和な様子で、自分と同じ学生服を羽織った生徒たちや、ネクタイを締めた出勤途中の会社員たちが、それぞれの学校や勤め先へと歩いている。

挨拶を交わしたり世間話をしたりする彼らの様子を見ると、昨日味わった結界内の静けさが嘘のようだ。

とはいえ結界の境として目印にしていたあのポストが視界に入ると、どうしても幽鬼たちの放つ寒気や空虚な白い空を思い出してしまう。

当分の間、登下校時のトラウマスポットになりそうだ。

「やあ、神田君」

背後からかかった声。振り返るとそこには、昨日剣道場で出会った、あの小柄な男子生徒の姿があった。

彼はリュウジのところへ駆け寄ると、隣りを歩き始める。

「おう、おはよう。登校時間に関しちゃ意外とマジメなんだな」

「まあね。遅刻したら学校入りづらいし、何よりサボるなら道場に行けばいい」

「すっかり依存しちまってるんだな」

さわやかな微笑を浮かべながらも際どい発言をする男子生徒に、リュウジは呆れがっくりと肩を落とした。

こいつがサボっていたことが生徒指導部あたりにはれて、それをきっかけに道場の使用禁止を食らうことだってありそうなのに。

「心配しなくても、授業に出られそうな日はちゃんと教室に行ってるよ」

男子生徒は妙に余裕そうだ。こいつなら生徒指導の先生たちにくら叱られたって蛙の面に水だろう。

こういうやつばかりが集まったせいで、あの名門剣道部は廃れてしまったんだろうか。

リュウジが彼のサボりを指摘したとき、「ここは『そういう所』なんだよ」と言っていたくらいだし。

「そういえば昨日は剣道部のことばかりで、僕自身の紹介がまだだったね。僕は日野速男つるはや。これからよろしく頼むよ」

リュウジの白けた目つきに気付いているのかいないのか。日野は人懐っこい笑顔を浮べて名乗った。

その表情と好意的な内容のせいか、さっきまでの悪い印象が少し和らいだ気がする。

「ああ、よろしく」

とりあえずその一言を、無難に返しておいた。

うららかな春の陽気の中を、通行人たちがせわしなく流されていく。

それは冬の寒空の下であろうと夏の逃げ水の上であろうと変わらない光景だ。

時間に縛られて行動しなければならない人間という生き物の常である。

それでも、このおだやかな気候にはつい足を止めてしまいたくなる何かがある。

「あら、ハヤオくんじゃないの」

「おはよう、おばさん」

四十歳くらいの女性に不意に呼び止められた。日野の知り合いのようで、彼は親しげにあいさつを返す。

日野に微笑みかけた後にリュウジとも目があってしまい、リュウジもあわてて会釈をした。

「神田君、学校始まるまでまだ時間もあるし、ジュースでも飲んでいかないかい」

「ジュース？」

昨日腹を空かせながら歩いたときには、このあたりにはコンビニも自動販売機も見当たらなかったというのに。

日野の鞆に飲み物が入っている様子もない。

ニコニコしたままの日野とおばさんの視線を追ってみると、おばさんの出てきた家の奥に色とりどりのお菓子やおもちゃが並んでいるのが見えた。

正面の扉がガラスになっているところを見ると商店なのだろう。

思わず物珍しそうな顔をしていたリュウジの様子に気付いたおばさんが声を掛けてくる。

「あれ、お兄ちゃんもしかして都会から来たのかい？」

「なんでわかったんすか」

「こういつタバコ屋、今じゃ田舎の商店街くらいにしかないだろうからねえ」

言われてみれば、リュウジは今までにこういった店に立ち寄ったことがなかった。

お菓子やジュースといえばもっぱらコンビニかショッピングモールで買っていたし、そもそもこういった店は近所になかったからである。

「うちの店はお菓子を買うちっちゃい子たちと、タバコを買う近所

のお年寄りのお客さんが中心だね。高校生のお兄ちゃんが寄ってくるなんて珍しいよ。あ、ハヤオくんはいつもありがとだね」

たばこと書かれた小さな看板とガラスの出入り口から覗く商品だけがここを商店たらしめており、コンビニのような外装を探していた昨日のリユウジにはパツと見ただの家に見えていたのだろう。

狭い店内にお菓子やおもちゃを思いっきり詰め込んだように展示した店内が、自分の中の遊び心のようなものをくすぐってくるように思えた。

「神田君、このお店が気に入ったみたいだね。あ、おばちゃん。瓶入りのオレンジジュース二本ちょうだい」

いつのまにか顔がにやけていたらしい。日野に肩をポンと叩かれて、冷たい瓶を手渡される。

「瓶で飲むとうまいんだよ」

グルメ番組に出てくる食通のように、粹を語りながら瓶を傾ける日野。その姿にはもう憎たらしさは感じなかった。

そつだ。春の陽気に似ているんだ、こいつは。

時間を忘れて思わず足を止めたくなる、甘ったるい暖かさ。

「悪くないな、こいついつもの」

たまになら、授業をまるまるサボるのにもつきあってやろうかな。

リュウジは日の光をいっぱいに浴びながら、タバコ屋の前でこのゆったりとした時間を楽しんだ。

その日の放課後、クラスメイトたちへの挨拶を済ませてリュウジは教室を後にした。

もう少しこの街のことを聞いたり都会の学校について語ってもよかったのだが。

集団を相手に自分について話したり、矢継ぎ早に質問されたりすることがやや苦であった。

「転校生つてのも楽しじゃないな」

さらには転校の理由である剣道部がまともな状態ではないのだ。

そんな自分を尻目に部活へ、バイトへ、それまで話していたクラスメイトたちが自分の打ち込める時間へ一人、また一人と向かっていく姿が羨ましく、そして自分が取り残されているようで不安になったのだ。

「打ち込めるもの……か」

気晴らしも兼ねてバイト募集の張り紙を探しに外へ出てみようか。

それとも、道場で日野のやつと一緒にくつろぐことにでもしよう

か。

廊下を歩く生徒たちは目的地がすでに決まっているようで、玄関や部活の活動場所へと勢いのある人の川ができています。

リュウジは廊下を流されるように歩いた。

人ごみというのはいつも身動きがとりにくいもので、速く進むことも立ち止まることもままならない。

それぞれの歩調もまた微妙に違うため、何を基準に進むかは個人に委ねられる。

その様子は個人と社会のあり方にも似ている。そう考えると、すこし窮屈になった。

出る杭は打たれるが、凡庸すぎてもつまらない。加減を数ミリでも間違えると、とたんに生きにくくなる世界。

そう考えると、クラスでの会話を早めに切り上げたのは失敗だったかなとリュウジは嘆息した。自分にとってはちょうどいい頃合いだったようにも思えるが。

廊下を流れる人の川は、速すぎず遅すぎず。律儀にも同じスピードを保ちながら進んでいた。

「ちょっと失礼しますわ、ごめんなさいね」

その流れを背に受けて加速しながら、人ごみをかきわけてリュウ

ジへと迫ってくる少女がひとり。

「はあ、やっと追いつきましたわ」

荒く息をしながらも手を腰に当てて胸を張る花梨の姿は堂々としていた。

秩序的な流れを潜り抜けることによって、存在感が溢れ出している。はたから見ればかっこいいのかも知れないが押しつけられた人々には迷惑なわけで。

槍のように鋭い視線が背後からいくつも飛んでくる。本来は花梨に向けられているであろう非難の目という弾丸を、真横にいるリュウジもバツチリ被弾していた。

「せっかくこのわたくしが教室まで迎えに行つて差し上げたというのに。あなたときたら既に教室を出ていましたとは」

「迎えにきた？」

そしてそんな視線は完全にスルーしてしまう花梨。しかたないの  
でリュウジも彼女の言葉を追うことにした。

「ええ、こんな大サービス一生に一度あるかないかの出来事と思いなさい」

「俺に、何か用事でもあるのか？」

リュウジにはその理由が特に浮かんではこなかった。自分の知っていることはすべて教えだし、昨日のことは誰にも話したりはして

いない。

そもそも、結界に閉じ込められて幽霊に襲われそうになったところを同級生の金剛院花梨と高坂綾子に助けてもらったなんてトンデモ話、仮にしたとしても誰も信じたりはしないだろう。

逆に中途半端な興味を持たれて質問攻めにされたり、からかわれたりするのも面倒だ。

「この騒がしい廊下で立ち話というのもなんです。あなたを案内したい場所があるのでそこへ向かいますよ」

とりあえず、彼女の真意（あるいは綾子も合わせた彼女らの真意）が何かというのはしばしばおあずけのようだ。

西洋の血脈を隠しきれない瞳と顔立ちを持つ彼女だが、背丈は160センチ手前程度だ。

こちらを見上げてくるマリンプルーの視線は相変わらず真っ直ぐで、彼女の生真面目さが表れている。

「わかった。どうせ暇だし、案内を頼む」

リュウジはこの時、極めて軽い気持ちで同意をした。

実際退屈していたし、霊や魔術への興味が芽生えていた今、花梨についていけば何かおもしろいことを体験できそうだと考えていたからである。

廊下を流れる人の川は玄関という分岐点に突き当たり、帰宅する

者や外で活動を行う者たちが一斉に外へ出て行った。

窮屈だった周囲に少し余裕が生まれる。

「とりあえず、特別教室や文化部の部室が集まる特別棟へ参りましよう」

リュウジと花梨はそのまま廊下を真っ直ぐに進んで、隣の棟へと移った。

調理実習の後なのだろうか。調理室からは香ばしい香りが漏れている。

他にも内履きを脱ぐための玄関が設けられた和室（主に茶道部や書道部が使うらしい）があったりと、なかなか目を引く場所になっていた。

「これから案内する場所は、ここの四階ですわ」

そう導かれて階段を登っていく。

二階は生物室や実験室といった理系の実習室が、三階は音楽室や映像鑑賞室、美術室といった芸術関係の部屋があった。

二階でも三階でも文化部員らしい生徒を多く見かけたが、彼らは運動部に負けず劣らず楽しそうで、充実した時間を過ごしているようだった。

「やっぱり、熱中できる部活があるのっていいよな」

楽器や画材を抱えて廊下を歩く彼らの足取りは軽い。階段を登りながらちよつと見るだけでも、それは明らかだった。

四階ではどのような活動が行われているのだろうか。時間をおいた分、期待も高まってくる。

三階から聞こえる吹奏楽部の力強いトランペットの音色をバックに踏み出し、階段も踊り場にさしかかった。

「最新刊の写真の件。自宅コンピュータにてスキャン。画質を向上……」

「で、どうだ？ 見たのかよ宇宙人」

二人の男子生徒が横を通り過ぎていく。すれ違いざまに聞こえた会話の内容は、リュウジにはよくわからないものだった。

それにぶつぶつと低く囁くようにしゃべる男と、妙なテンションで騒ぐ奴の二人組だ。

醸し出す雰囲気も重苦しく、あまり関わり合いになりたくない。

窓からの日差しや湿気が変わったわけでもないというのに、暗くじめじめしているように感じる。

たどり着いた四階はこれまでとは全く違う場所だった。

「あ、怪しい……」

これまでに見かけた生徒たちに比べて、廊下を歩く部員たちの顔

からは生気を感じられず、どうも根暗な印象を受ける人物が多かった。

それぞれの部屋の前には『創造的宇宙研究会』や、『ビシヤモン聖典解明同好会』、『フリーメーソンと闇の世界史研究部』などと聞き慣れない部名ばかりが並んでいる。

「どうして世の中、でかい期待を抱いた時に限って外れるんだろうな」

思わず立ち止まり、がっくりと下を向いてしまう。

「おや？ 長い階段に疲れてしまったのですか」

「いや、運命の不条理さというか、世の中の残酷さというか、そういうものに疲れた」

ロール髪をバネのように揺らして花梨がこちらを振り返ってくるも、すぐにまた先に行ってしまう。

揺れるクロワツサンを目印に慌てて追うリュウジ。

『非情な運命に立ち向かえ！ 死なんと戦へば生き、生きんと戦へば必ず死すものなり！ 毘沙門天は見ていて下さる』という謎の張り紙が、とにかく皮肉である。

そんな胡散臭い廊下の一番奥に、花梨が案内しようとしていた部屋『心霊研究部』があった。

部活の名前を見て「さっきのやつらよりマシだな」と思ってしま

うのは、リュウジにダメな免疫がついてしまったせいなのであろうか。

「連れてきましたわよ」

「おかえりやす」

綾子がお茶を用意しながらそこにいた。

部室内は案外こざっぱりとしていて、デスクやパソコンなど一般的な事務所にあるようなものしかない。

あやしげな魔方陣だの祭壇だの、人型に切り取られた紙人形だのが置かれているのをリュウジは想像していたが、そんなことはないようだ。

部屋の中心では机を四つ組み合わせて会議ができるようにセッティングされている。

奥の席には綾子と、もう一人男子生徒が座っていた。

「ほう、彼がそうか」

フレームがなく薄いレンズの眼鏡をクイツと上げながら、男子生徒が興味深そうにリュウジをうかがう。

いかにもインテリといった風体の彼には、このようなオカルト関係の部活にいるよりも科学関係の部活でピーカーやフラスコと戯れている方が性に合いそうだ。

「ええ、二年一組の神田リュウジさんですわ」

「神田神宮の跡取り。剣道二段。テストの成績は平凡。といったところかな」

「な、何なんだよいきなり」

男子生徒は口元をわずかにつり上げてはいるものの、その瞳には一切の感情を出していない。

初対面ながら実家のことや成績のことまで知られていることにリュウジは薄ら寒い気配を覚えた。

「単に事実を述べたまでだ。これといった感想は持ち合わせていないから安心したまえ」

ガラス玉のように無機質な目を見る限り、本当にリュウジを見下しても尊敬してもいないようだ。

そもそもどうしてリュウジについて知っているのかという疑問は残るが、わざわざ教えてくれそうな雰囲気はない。あとで花梨か綾子にでも聞くとしよう。

「世間話に呼んだんじゃないみたいだな」

リュウジのプロフィールを言ったこと自体に意味はないようである。本題にはこれから突入するのだろうか。

立ったままガラスのまなざしを受け続けるリュウジを、綾子がまあまあと席にすすめる。

花梨はすでに着席しているようで、湯のみを傾けてすっかりくつろいでいた。

来客と男子生徒がこういったやりとりをするのは日常茶飯事なのだろうか。あまり客が来るとは思えない部活だが。

「ようこそ心霊研究部へ。わたしが部長の三條紀明だ」

「ま、お茶どうぞ」

両手を広げ、カリスマ全開で紀明が言うも、いつの間にかリュウジの側に立っていた綾子がお茶を差し出すことによって空気が和んでしまった。

紀明がちょっと残念そうな目で綾子の方に視線を移す。

どうやら今までの不敵な態度は演出だったようだ。こいつ、案外普通な奴なんじゃないかとリュウジは安心した。

花梨が普通にくつろいでいたのも、紀明がそんなに危険な人物ではないとわかっていたからなんだろう。

後で頭をグリグリして情報源を聞きだしてやるのか。少なくとも腕っ節では勝っていそうなわけだし。

「え、えへん。その、今回キミにこうして来てもらったのはだね」

慌てて威厳を立て直そうとする紀明を、花梨と綾子が意地の悪そうな微笑を浮かべて見守っている。

「亜空結界に入れるほどの霊力と、二段の実力を有する剣道の腕前を見込み、この心霊研究部に入部して欲しいのぢ」

「オホホ、やっぱり噛みましたわね」

「んもう。小難しい言葉なんて使って格好つけるからこうなるんどすえ」

それまで得意げな顔で話していた紀明の頬が見る見るうちに紅潮していく。

その様子を確認した女性陣はさらにボリュームを上げて笑った。

「わ、笑うな。この程度のミスは誰にでもある」

「これでは部長なんて到底務まりそうにありませんわね。リュウジさんに任せた方がよっぽどよろしいのでは？」

「何を言うか！」

もしかしてこの部活は心霊研究部なんかじゃなくて、『ノリアキいじり部』なのだろうか。

リュウジは慌てふためく紀明の首でも背後から絞めてやろうかと、密かにいたずら心を燃やした。

「ま、まあまあ。部長はんが拗ねる前に話を戻しましょうか」

未だに爆笑しながらではあったが、綾子が場を鎮める。

椅子から立ち上がるうとしていたリュウジとさらに意地悪を言うとしていた花梨は少し残念そうに聞く姿勢に戻る。

「先ほども述べた点より、キミにこの部活に入って欲しいのだ。今日はそのための説明と、活動風景を少し見てもらおうと思ひ呼んだ次第。金剛院君、説明したまえ」

「かしこまりましたわ、ヘッポコ部長さま」

ビシリと指図するもこの扱いである。

どや顔を一気に捨てられた犬のような表情に変える紀明。

悲痛にまみれたその視線などどこ吹く風で、花梨は優雅に髪をかき上げて説明を始める。

「当心霊研究部では、表向きにはその名の通りの活動をしておりますわ。市内の心霊スポットを巡ったり、歴史的ないわくがあるかを調査したりして、その結果をまとめた掲示を文化祭にいたしますの」

「うむ、どこにでもあるオカルト研究の同好会だな」

堂々とあいづちを打つ紀明。貫禄を示すタイミングを常につかっているようなのだが、もはや苦し紛れにしか映らない。

「ですが最近の活動はもっぱら、異常なまでに現れる戦国時代の兵士たちを調査することです。あなたも、あの首のない足軽兵たちをご覧になったでしょう」

「ああ。確かこの街は昔小さな国があった場所で、大きな国同士の戦いに巻き込まれて滅んだ。そのせいでここにはその時代の幽霊がたくさん出るんだよな」

「よくぞ覚えておりました。この春になってから目撃情報が増え、霊力に乏しい市民の目に彼らの姿が映ることも多くなったようです。さらには、妙な噂まで広がっているのです」

「噂？」

花梨の声のトーンが下がる。

「首のない亡霊を目撃した者は、不幸になるという噂です」

世間を漂う怖い噂に必ずといっていいほどついてくる『不幸』という単語。

具体性をあえて示さないことにより、かえって不気味さを醸し出すのである。

「彼の亡霊たちによる現実的な被害は、今のところ確認されておりません。しかしながら、わたくしども心霊研究部では嫌な予感を隠しきれないのです。何かの、前触れではないのかと」

「うむ。こういった類の話は警察や消防といった表の機関では扱わぬので、不安がる市民も多いのだ。解決までとは言わぬが、とりあえず調べてはみようと今の活動をしている」

紀明をはじめとする部員一同の顔にも、その不安は表れている。

そんな中、リュウジは紀明の言いまわしにどこか引っかけかりを覚えた。

「なあ、今『表の機関』って言ったけどよ、こういう心霊現象への対策をする『裏の機関』でも日本にはあるってことか？」

裏に機関がないのなら、『表』なんて言わないはずだ。

リュウジの問いを受けた部員たちは一瞬戸惑ったようにも見えた。

「それは本来なら知ってはならぬことだ。まあしかし、実家が神社ならキミが家督を継ぐとき、あるいは神職の資格を得たときにいずれわかることでもある。今少しくらい話しても問題はあるまい」

「リュウジはん、意外と鋭いんやなあ。このことは絶対に内緒どすえ」

念を押す綾子。そんなにも『裏』とは危険なのだろうか。

三人の中では一番花梨が迷いを見せているようだったが、やがて意を決したように喋り始める。

「この国には、迷信的分野の問題を一手に引き受ける『神祇省』という機関があります」

「何だそれ？ 霊能力者か、霊媒師か何かの集団か？」

「当たらずとも遠からず、といったところでしょうか。この国は長い歴史の中、仏教、密教、風水、陰陽道、宿曜道など、様々な信仰や占術、呪術、哲学を取り入れてきました。通常なら受け入れられ

ないほどの多くの教えを吸収するに至ったその土台こそ、日本古来より根付く『神道』なのです。『神祇省』は神々と人が協力し、国を守護するために生まれた、神官の組織です」

「ちよつと待て、そもそも神様なんているのかよ」

神社に生まれたリュウジにさえ、にわかには信じられなかった。

住み着いた武士の亡霊マサを除けば、神はおるか、妖怪や幽霊といった神秘的な存在を目にしたことなんてほとんどなかったからだ。

「ええ。ご実家が神社のあなたなら、祀っている神様にお会いしたことがあるかもしれないとは思ったのですが……」

「あるわけねーだろ！　ってゆーか、そんなホイホイこの世に顕現しちゃダメだろ神様」

「リュウジはんが宮司になれば、普通に会えます」

神祇省とやらが話題に上がってから、疑問が次々と湧き上がってくる。

裏と呼ばれるだけに非現実的であり、あまりに理解し難かったし認められなかったのだ。

とはいえ、リュウジが疑問に思うことはすべて心霊研究部員たちにとっては常識の範囲内らしい。

このままでは話が先に進まないことは齒がゆくも、リュウジには予想できていた。

「わかった、百歩譲って神様の存在は認めよう。でもそんなスゲー組織なら、幽霊なんて楽勝なんじゃねえの？」

「それは……」

とたんに綾子と紀明が表情を曇らせる。そして二人は一斉に花梨の方を向いた。

「この街を担当するのは」

花梨は唇を噛み締めて下を向いていた。小刻みに体が震えている。

「神祇省の役人はこの街にもいますが、あてにはなりません！だからこそ、わたくしたちがどうにかしなければならぬのです」

マリンプルーの瞳が涙に濡れ、口元は引き結ばれ、花梨は強いまなざしをこちらに向けてくる。

彼女の姿からは言葉通りの決意とともに、何かとても、悲しいものをリュウジは感じた。

目の前で少女が今にも泣き出しそうになっているも、この話題を出したのは自分。まして自分は、部外者だ。

神祇省がどうか、『裏』の機関だから隠さなきゃいけなかったとか、そういうことはあまり問題ではなかったのだ。

このあたりの問題は秘密であっても、実家が神社でそこを継ぐ予定のあるリュウジには、遅かれ早かれ知るはずのことだった。

部員たちが顔を渋らせた本当の理由。

それはこの話題が、花梨と深い関係にあったためなのであろう。

もどかしくも、今のリュウジには様子を見ていることしかできなかった。

花梨が気を静めるまでの間、部室内を気まずい静寂が支配する。

綾子に背中をさすられたり頭を撫でられたりして、ようやく花梨は平静をとりもどしたようだ。

「……少し、取り乱しました」

「すまなかった」

「あなたが謝罪をする意味がわかりませんわ。わたくしが一人で取り乱した。ただそれだけのことです」

花梨は表情を殺して視線を斜め下にずらす。

顔の筋肉がこわばっているようにも見えだが、それでも表情を崩す気配はない。

花梨は何事もなかったかのように、説明を続けた。

「神祇省は、神々の言葉である『神託』を受けなければ動くことができないのです。事態が悪化する前に先手を打ちたいところですが、指示が来ないために傍観にまわっています」

「逮捕状がなきゃあ犯人を捕まえられないのと同じってわけだ」

妖怪、幽霊といったものたちを相手にした、神々の戦いの先鋒である神祇省。

そのため人間が勝手に判断を下すことはほとんどできず、「上からの指示待ち」状態になってしまっているようだ。

「神託は言わば予言に近く、神祇省は常に大きな手がかりを掴んだ状態で捜査を始めることができました。そのため日本では大きな霊的事件が表沙汰になることがほとんどなかったのです」

ただの号令ではなく、事件解決の足がかりをつくるきつかけでもある神託。

それが来ないことによって、神祇省もまた日和見をせざるをえなくなっている。

ただでさえ上下関係の厳しい公共機関。神祇省ではそれに加え神という巨大な概念や歴史的なしきたりなどが深く関わっている。

それだけに、なおさら経津丘にある支部は動きにくくなっているのである。

「しかたないことなんだよな」

リュウジがその言葉を発した瞬間、花梨の目つきが鋭くなる。つり上げられたマリンプールの相貌は熱を帯びていた。

だが、先ほどのことを踏まえてのことだろう。花梨はすぐに表情を取り繕い、再び視線を落とした。

リュウジは再び、申し訳のない気持ちになった。花梨はきつと「しかたない」の一言で片付けて欲しくはなかったのである。

神祇省が動けないという状況に一番憤慨していたのは彼女だったし、街に侍の亡霊がたくさん出現するようになった事態を一番重くみていたのも彼女だ。

それだけでなく、もっと個人的な何か関わっている可能性もある。

心霊研究部の一員でもなく、ましてこの街に来たばかりのリュウジ。

一介の高校生には手出しできない内容であるにしろ「しかたない」では終わらない問題だ。

他人事のようにしか聞こえなかったとしてもおかしくはない。そう考えると情けなかった。

えへんと咳払いが聞こえる。

「さて、少し脱線はしたがこの部活に関する説明はこんなところだろう。細かいことは追々説明しようと思う。入部に関して今すぐ返答はできないだろうから、今すぐには聞かない。また時間に都合がつくときにでも足を運んでくれたまえ」

紀明の落ち着いた口調に、リュウジは我にかえる

「あんまりお構いできなくてすみまへんなあ。けど、うちらも人材不足やさかいに前向きな答えを期待してますえ」

綾子が柔らかい笑みを浮かべながら軽く頭を下げる。なめらかな黒髪で顔が隠れてしまふのが惜しいほどに艶やかな笑顔だった。

霊や魔術への興味もあつたし、花梨と綾子には恩もある。

何より退屈しのぎになりそうと気軽にくぐつた門だったが、これは真剣に考える必要がありそうだ。

花梨は未だリュウジと視線を合わせてくれない。

リュウジは部員たちに簡単な挨拶をして、心靈研究部室を後にした。

『初対面の相手と言いつ争いをしたかと思えば、謝つたり、感謝の意を示したり　　がさつに見えて、意外に器用な生き方をしているよ　　うですわね』

花梨と初めて会つて言われたこと。そして彼女はそんな自分を羨ましいとも言つてくれた。

それがどうだろう。今日は空気の読めない質問ばかりして花梨を傷つけてしまった。

「ごめんな、俺は器用なんかじゃないんだ」

もの見事に期待を裏切ってしまった。リュウジは小さくため息

をつきながら階段を下りていく。

こつり、こつりと硬い足音だけが空しく響いた。

夕闇が町並みを包み、夜の足音が聞こえ始める頃。

薄暗い住宅街を眺めながら、リュウジは紀明が最初に部の説明だけでなく活動風景も見て欲しいと言っていたことを思い出した。

結局説明と質問だけで終わってしまった心靈研究部の初見学。本当だったら何か活動の様子を見せてもらえたのかも知れない。

場の雰囲気悪くしてしまった自分は、追い出されてしまったのだろう。

通学路は薄闇を纏うと一層寂しさが強まり、そして寂しさは悲しい記憶ばかりをリュウジの脳から引き出そうとする。

光沢のある赤い巻き髪に、涙に霞んだ青い瞳。

ふくれっ面ばかり見せたかと思えば夕焼けの中笑顔を見せ、部室では爽やかに説明をしてくれた彼女。

いつまで経っても離れることのない面影を、頭を振って引き離そうと試みるもなかなかうまくいかない。

自分の言葉をきっかけに、あいつは泣いてしまったのだから。

春先は昼と夜の気温差が激しく、冷たい風が吹き抜けていく。

家々の窓にはぼつぼつと明りが灯り始め、本格的な夜の訪れを告げようとしていた。

その様子を確認したリュウジは、自分も早く帰ろうと少し早足になった。

ごつごつと左右を固める建物や植木の影。リュウジの前方にある家の玄関の明かりが突然灯される。

「はい、そんじゃ今日はこの辺でね」

ガラガラと戸の開く音がして、その家から伸びきった金髪を揺らしながら男が出てきた。

ピカピカに磨かれた革靴を履いた足を気だるそうに動かし、リュウジの前にまで出てくる。

蟹股で歩くその様子から、リュウジにはまったく気づいていないようである。リュウジはちょっと曲がり男を避けようとした。

「ありゃ、高校生？ あんだよお、ガキはさっさと帰んなきゃ」

男は粘着質な視線をこちらに投げてくる。

またまた面倒な奴に会ってしまったものだと、リュウジは言葉を返すことはせずに落ち着いて相手を観察した。

長い金髪にとがった顎、耳には派手な銀のピアス。すらっと伸びた体軀は猫背と蟹股のせいで台無しになっている。

ホストのような風貌ではあるが、シャツの上に羽織っている上着がそれを否定していた。医者が研究員が着るような白衣である。

興味があるのかないのか。チャラそうな男にじろじろと眺めまわされるのは気分がいいものではない。

リュウジはさっさと立ち去ってしまおうかと足をわずかに浮かせる。

「あら、確か朝八ヤオくんと一緒にだった神田くんじゃないの」

「あ、おばさん。こんばんは」

ふくよかな声が耳に飛び込んでくる。明かりの点いた玄関の中から微笑みかけてきたのは、タバコ屋のおばさんだった。

声の調子だけならば朝と余り変化はなかったのだが、その笑顔は疲れているのか、翳りが見受けられる。

「ああ、知り合い？ まあいいや、俺はこのへんで帰りますよっと。また何かあったら連絡ください」

おばさんに対して適当に呼びかけると、軟派そうな男は白衣のポケットに手をつっ込んで去っていった。このチャラ医者め。

何はともあれ、ウザそうな男が去っていったのはいいことだ。リ

ユウジは心の中でほっと一息つきながらおばさんの方を向いた。

「高校生のお兄ちゃんはこんな遅い時間まで学校にいるのね」

「この時間帯はまだまだ序の口つすよ。俺はただチラツと部活を見学して帰っただけで、本格的にやってる所は今も部活中つす」

「そうなの……」

「ところでおばさん、なんか疲れてるみたいだけど大丈夫つすか？それに、さっきの人はいつたい……」

おばさんは少し頬がやつれ、顔色もどこか優れないように見える。

チアラ医者の方を去っていった方向を見ながら、おばさんは静かに口を開いた。

「うちの人が、昨日の夜に眠ったきり部屋から出てこないのよ。呼んでも返事しないしドアも開かないし。元気だけがとりえみたいな人なのに。さっきの人、志賀先生っていうんだけどね。先生が診察しても、疲労で寝ているだけだつて」

「旦那さん、疲れているんですかね？」

「ただ疲れてるだけだといいいけど。おかげで気持ちがとても落ち着かなくてね」

おばさんの調子が悪そうなのは、旦那さんのことが気がかりなためであろう。

一陣の冷えた風がおばさんの髪を揺らし、ビュオオと気味の悪い唸りをあげる。

冷めた空気に覆われた住宅街を、風は重苦しく流れていった。

四月の上旬であれば当たり前の気温のはず。毎晩のようにこのくらい寒さにはなるものだ。

そうとわかっていながら、リュウジには嫌な予感がしていた。全身を舐めるこの冷氣と身震いが、本能に危険なメッセージを伝えてくる。

「昨日の夕飯の時も元気がなくてね、あの人。『噂の首なし幽霊を見ちまった』とか言ってるのが怖いよ。まったくあの人が怖い」

その言葉を聞いて、リュウジは顔に出ないよう必死に驚きを隠した。

さつき心霊研究部で聞いた噂の通りの体験を、旦那さんがしてしまったのだ。

おばさんの様子を見るかぎり、おばさん自身は噂についてはまだ知らないようだ。

部屋から出てこられない。これが噂の語る『不幸』の一環なのだろうか。

リュウジは不吉な予感とこの事実がどこかで繋がっているのではないかという気がしてならなかった。

「さて、ちょっと遅れちゃったけど夕飯の支度をしないとね、あの人もお腹を空かせているだろうし。またいつでもお店に来てちょうだいね」

「ありがとうな、おばさん」

家に戻ったおばさんの姿を見届けると、リュウジは冷たい空気を裂いて学校の方向へ一目散に駆け出した。

向かい風が進行を妨げようとするも、懸命に足を動かす。

「あいつらなら、何か知っているかもしれない。何か手を打つことができるかもしれない」

心霊研究部に相談して、このタバコ屋を調べてもらおう。そうリュウジは考えた。

タバコ屋の住所は、昨日首なしの足軽たちに出会った場所のすぐ近く。旦那さんが倒れたことと関係がある可能性は大だ。

志賀とかいうチャラ医者 of 診断結果は正常。医学という表の常識でならそうなるのだろう。

しかし裏に、霊や呪術に通じた者たちがこのことについて調べたならば、結果は変わるかも知れない。

太陽は西の空にわずかな夕焼けを残すのみで、すでに沈んでいる。トルコ石のように淡かった空の青さに、濃紺がじわりと広がっていく。

急速に下がりつつある気温がリュウジの不安を煽った。

「頼む、間に合ってくれ」

学校に着くまではまだ時間がかかる。

今も部室にみんな居るとよいのだが、すでに活動が終わっている可能性もある。急がなければ。

時計の砂がこぼれるようにゆっくりと、しかし確実に夕闇は静かな田舎町を飲み込んでいく。

走るリュウジの視界の先で、通りに人影がうごめいているのが見えた。

「あれは！」

むき出しの青白い手足に古びた胴鎧、そして首のない十人ほどの集団。

噂の亡霊たちだ。

前回見かけた時と同じく、彼らは隊列を組みながらも力なく歩いていた。

特に目的意識を感じさせるわけでもなく、その歩きかたはむしろ虚無感さえ感じさせる。

おぞましい姿に身震いがするも、リュウジはそのまま走り続けた。

「おいお前ら、タバコ屋の旦那さんに何をした！」

五メートルほど距離を置いて、足軽たちとリュウジは対峙する。

彼らは足を止めるもリュウジの問いの答える様子はなく、ただ黙ってこちらの様子をつかがっていた。

「な、なんとか言えよ！」

リュウジの怒声だけがこだまする。足軽たちは両腕をだらりと下げ、立ち尽くしているだけだ。

顔がない上に一切の動作もないので、何を考えているのかさっぱりわからなかった。

「おい、いい加減に」

「危険です、下がっててください！」

狭い路地からいきなり二つの人影が飛び出してきてリュウジを飛ばすように立った。

赤いロール髪と長い黒髪、そして経津丘高校指定のセーラー服。花梨と綾子だろう。

「まったく。一体何をお考えなのですか」

後ろからなので表情はわからないが、花梨の口調からは苛立ちが感じられる。

「生憎今日は偵察の予定しかしとりませんでした。早いとこ逃げまじよ」

「けどよ……」

綾子がいつになく緊張した面持ちでこちらを振り返ってくる。

だがリュウジはその提案をにわかに受け入れる気にはならなかった。心霊研究部のメンバーと首なしの幽霊が一同に会している今こそ、タバコ屋の旦那さんに起こったことの答えを掴むチャンスだと思っただからである。

リュウジと綾子がそんなやりとりをしている中、花梨はポケットから素早くイヤホンを取り出し、右側を耳に付けて左側を自身の口元へ運んだ。

左のイヤホンをマイクのようにして何か吹き込んでいるのだろうか、ぶつぶつと何事かを呟いている。

「お前何してんだよ」

「花梨ちゃん、下手に刺激したら……」

綾子の忠告も間に合わず、花梨は亡霊たちに向かって右の手のひらをかざした。

「おいでなさい。八部背童子、神室姫」

薄闇に光が生まれる。嵐の暗夜に閃く稲光のように闇を裂いて、

二つの人影が花梨の眼前に躍り出た。

ひとつは、ひらひらと着物の裾をなびかせるショートヘアの可憐な少女。

そしてもうひとつは、頭に角を生やし、少女の倍近くはあるう背丈を誇る『鬼』だった。

「お、もうひと暴れできるのかお嬢ちゃん」

「あわわわ、ダメですよ花梨お嬢様！ また無断でわたしたちを呼んだんですか」

昔話で語られる通りの巨大な金棒を振り回して勇む鬼。その肌は紅潮した人のものとは異なり、絵の具でも塗ったような赤さをしていた。

その一方で、少女は困惑の表情を向けながら花梨へと抗議を始める。

「ああもう。こないだは人助けのためということはどうにかなりましたがね、二度目とあらば旦那様から怒られちゃいますよ」

「今回もちゃんとした人助けですわ」

神室姫と呼ばれていた少女がバタバタと両手を振って懸命に抗議するも、花梨はさらりと聞き流した。

「それに、その様子だと何か手がかりを掴んだ上であの亡霊たちに話しかけたのでしょうか。神田リュウジさん」

「ああ、そうだ」

「それならばわたくしが協力いたします」

花梨はちらりとリュウジを振り返る。その口元にわずかな笑みがあつたことをリュウジは見逃さなかつた。

「さあ八部背童子、神室姫。あの者たちを蹴散らし、そのうち一人を捕らえなさい」

「おうよー！」

「だからダメですつてばああああ！ わたしはお嬢様を止めに来たんです」

びしりと指示をしたというのに神室姫に反抗され、花梨は少し残念そうだ。

だが鬼の八部背童子の方は乗り気のように、意気揚々と足軽たちに向かって金棒を振り上げながら突進していく。

亡霊たちもまたそれぞれの得物を引き抜いて身構えた。

その様子を見て得意げな顔をする花梨。神室姫は鬼とお嬢様を交互に見ながら慌てふためいている。

「うおらあっ！」

八部背童子の金棒が大地を揺らす。押しつぶされた一人の足軽の

姿が、塵のようになって霧散していく。

他の幽霊たちも応戦しようと槍先を向け、刀を構えるも、鬼が蹴るように脚で牽制しているためか、なかなか攻めに転じることができないようである。

意を決して一人の足軽が刀をかざして八部背童子へと向かっていく。

まるで薪割り用の斧でも構えるように、頭の後ろまで剣先を振りかぶって両腕に力を入れていた。

「甘めえ」

鬼は片足を引いて距離をおくと、その体の回転の勢いを利用して再び金棒を振り下ろした。懸命に立ち向かった足軽が消えていく。

「グハハハハ！ そんなお粗末な剣法で俺様は倒せんぞ」

「ああもう、旦那様に雷落とされても知らないんだから」

「あ、いけね」

神室姫の怒声に八部背童子はハッとす。

「もう、わたしたちは帰りますからね。お嬢様もこんな危ないことに首を突っ込んでいないで、本省から神託が届くのをおとなしく待っていてください！」

「ま、待ちなさい」

言うが早いか、神室姫の姿は光に包まれて消えてしまった。八部背童子も名残惜しそうに光の中へ帰還する。

「そんな……」

残る足軽は七人。武器を持ってじりじりと迫り来る敵を目の前に、花梨は力なくうなだれる。その手から音楽プレイヤーが落ち、からんと音をたてた。

「さあ、うちらもはよう逃げんと」

綾子に促されながらも、花梨はまだ納得がいかないようである。

亡者たちの刃が月明かりを受け、青白く不吉に輝く。

落ちた音楽プレイヤー。そして、そのイヤホンを無線か電話のようを使い、鬼と少女を呼び出した花梨。

『異界に蠢く妖怪や魔物たちは、人間の作り出した概念を通じて人の住まう世界に現れる。我がお前の思念を通っているのは、その応用よ』

目の前で起こったこの現象と亡霊マサの言葉が、リュウジの脳内で結びついた。

「借りるぞ」

音楽プレイヤーを拾い上げるリュウジ。迫り来る刃。唾然としてその光景を見る二人。

がちやり、がちやり……。

亡者たち動きは非常に遅く、されど確実にこちらの不安を煽ってくる。リュウジは額にじわりと汗が滲むのを感じた。

冷たい風が顔をなで、汗をなぞりさらなる寒気をあたえてくる。

何百年も前からの居候で、笑い上戸で、剣の腕前は一級の平安武士。リュウジは彼の姿を頭に浮かべながら、左側のイヤホンに声を吹き込んでみた。

「おいマサ！ 聞こえるか？」

震えの混じった力のない声で呼びかけてみる。

がちやり、がちやり……。

周囲は静まりかえったままで、亡霊の足音だけが不気味に響いていた。

ふとリュウジはマサとの稽古を思い出す。腹の底から声を絞り出せ、気合こそ武道の根底だという、彼の教えが頭をよぎった。

がちやり、がちやり……。

血糊で錆び付いた剣が、槍が、飢えた獣のごとく迫り来る。

「来れるならきてくれ。っていつか来い！ 絶対来い！」

冷風が幾度となくリュウジの身体を冷やそうとするも、内からは熱い何かが込み上げてくる。

リュウジは顔をいからせて懸命に叫んだ。

「頼む、マサ！」

古来より、神々は自分を祀る神官たちや氏神と崇める家系の者たちと交流してきた。

親が子を育て、子が親を慕うように。

心の交流を持つことにより、神々は人間との間に絆を得た。

神々は巫女の身体に御霊みたまを宿し神託を与えた。審神者さしにわの立ち会いのもと行われるこの儀式を神懸りかみがか、帰神法という。

そして。

心を交わし強い絆を信じた神は人の呼びかけに応え、その姿を直に現した。

信じた者の思念、すなわち心を通り顕現する。それこそが神道の極意、映し神の召喚である。

「我を呼んだか、リュウジよ！」

周囲の薄闇をはるかに超える暗黒の渦がまきおこり、轟々と唸りをあげた。

渦の中から舞い降りたのは、侍烏帽子に大鎧を身に着けた猛々しい武士である。

装飾が施され人工美溢れる武具に、色白に切れ目の上品な顔立ち。

そうでありながら、武士が放つ闘気は野性的で、本能に直接訴えかけてくるような問答無用の恐怖を帯びている。

マサがその切れ目で足軽たちを一瞥すると、彼らはまさに蛇に睨まれた蛙のごとく立ちすくんだ。

腰に佩いた太刀をすらりと抜けば、氷のように輝く刀身があらわになる。

冷水に濡れたようになめらかに月光を照り返す刃。そこに浮かぶ波紋は業物の証だ。

「フッフ、首を失ってなお戦がしたいか」

マサが不敵に笑う。それはリュウジに冗談を言う時のものとは違った、獣じみた笑みだった。

かちりと鏗鳴りの音を響かせて、マサが太刀の切っ先を亡霊たちに向け中段に構える。

その先は一瞬だった。

最下級の武士が出稼ぎの農夫の集団である足軽兵たちの動きにはあまりに無駄が多く、マサの洗練された剣捌きに次々と餌食にされていった。

ある者は鎧の隙間を貫かれ、またある者は防具ごとその胴を裂かれ、小隊が全滅するのにさほどの時間はかからなかった。

冷たい鋼の輝きが一閃し、龍の牙のごとく刀が振るわれる。

最後の一人が塵となって風に消えるのが確認できると、マサは静かに納刀した。

「すごいなあ」

あまりの早業に綾子が感嘆の声を漏らす。

花梨もはじめはマサに注目していたが、やがてリュウジの方を振り返った。

「祝詞もなしに召喚？　ありえないですわ」

「俺もお前が鬼とかを呼び出したのを見た時はびっくりしたよ。それにしてもこれすげえな。本当に遠くにいる霊を呼べるのか」

突然現れたマサの姿に疑問を覚えた花梨と綾子をよそに、リュウ

ジは興味深そうに音楽プレイヤーの形をした機器を調べている。

見たところ市販の音楽プレイヤーと何ら変わりはなく、これが靈や鬼を召喚するものであるとは想像し難い。

「リュウジはん。もしかして花梨ちゃんが使ってはるのを見て、やぶれかぶれで使ったんどすか？」

「ああ、ダメもとでやってみたが、案外うまくいった」

「妙に余裕そうなのが癪に障りますわね」

「いや、俺だって恐かったんだからな。マサ呼んだのもやばかったからだし」

「うふふ。たしかにリュウジはん、必死に叫んではりましたからなあ」

これは恥ずかしいところを見られたと、リュウジが赤面する。女性陣が笑い声をあげた。

「フッフ、面白い集団だな」

しかしマサの冷静な分析を受けて、一同は我にかえた。

今度は自分たちも笑いの対象に入ってしまったと、花梨と綾子が慌てて口を閉じる。

リュウジはマサのことについて簡単に紹介し、花梨に音楽プレイヤー型の召喚機器を返した。

「それでだ、マサ。こいつらを紹介しようか？」

「それには及ばぬ。我はお前の思念　つまりは記憶を通じてここへ来たのだ。金剛院花梨嬢と高坂綾子嬢のこと、街を騒がせる戦国の亡霊どものこと、近くで菓子を売る店の者が怪異に巻き込まれたやも知れぬこと、寝床の下の猥画わいがの書のこと……大方心得ておる。二人とも、このリュウジが世話になったこと、礼を言うぞ」

「いえいえ、リュウジはんが機転をきかせてくれたんとあんさんのおかげで今回は助かりました」

「よ、よろしくお願いしますわ」

マサの謝礼に対しいつも通りはんなりと返す綾子と、少し緊張した面持ちの花梨。その様子に気付いたマサが花梨に語りかける。

「怖がることはない。我はあやつらと同じ、しがない亡霊よ」

花梨は未だ緊張を解くことができなかった。剣を振るう立ち回りといふ霊力といい、戦っているときのマサから尋常ならぬ何かを感じたからである。

「ところでなあ、マサはん」

花梨の様子を察してのことなのか勝手にそうなってしまうのかはわからないが、綾子が京なまりで発言するとなりがなごむ。

「何事ぞ」

「さつき言つてた『寢床の下の猥画の書』で。猥画なんて言葉うちには難しうてようわかりませんのや。何のことですしやる?」

「フッフ、それはな」

まるで部室の紀明をいじるときのような顔で、横目でちらちらリユウジを見ながらマサに質問する綾子。それを受けたマサも意地の悪い微笑を浮かべて返す。リユウジは背中に悪寒が走るのを覚えた。

「わああああ！ 待て、落ち着くんだ」

「わたくしも気になりますわね。聞きなれない言葉ですし」

「お前も便乗してくんな！ とにかく、今はそんなことより大事なことがあるだろ」

「な、何ですって。このわたくしをないがしろにするとはいかに寝ぼけたことをおっしゃっているか、ご理解なさっています？ 中世より続く貴族の系譜に連なるこのわたくしを愚弄するなど不届きですわ。この平等な時代において古い身分制を語るのも古臭いでしょうからここまでにしておきますが、それにしても何なのですかあなたのその態度は。野蛮で品性の『ひ』の字も見当たらず振る舞いには腹が立ちます。以前もわたくしの髪型をクロワツサン扱いしたりして！ まったく、一度小学校あたりからやり直されてはどうかと」

両目をつり上げ、頭のクロワツサンが焦げる勢いで説教を始めた花梨。

リユウジはすっかり彼女の勢いに押されて反論できずにいた。誰

かこのクロワツさんの説教マシンガンを止めてくれと、リュウジの表情が情けないものになる。

「花梨ちゃん元気になりましたなあ」

「フフフ……花梨嬢はいつもあのような調子なのか？」

「ええ、元気な子おですやる」

月の明りが優しく四人を包み、都会から離れた地方都市の夜空にはリュウジがかつて見たことのないほどの星が輝いていた。

「ちょっと、聞いていますの？」

もつとも、夜空を楽しんでいる余裕なんてないのだが。

### 第三章

教室の時計が静かに時を刻む中、先生の長い朗読が終わった。

リュウジはあくびを噛み殺しながら、この退屈ながらも律儀な時間の流れに身をゆだねている。

「はい、作品の朗読は以上になります。なかなか感動的だったでしょう。それでは各班でこの作品の作者が、読者にもっとも伝えたいテーマが何なのかを話し合ってください」

衝動から亡霊に自分から話しかけたり同級生が鬼を召喚したり、さらには自分自身が霊を呼び出したり。

昨夜にそんな非日常を体験したということが夢であったかのように明日はやってきて、リュウジは現実的で単調な日常の大部分を占める学校の授業を受けていた。

倫理の授業。今回は教科書の内容から少し離れ、先生の紹介した童話から学ぶという内容だった。

神の血を引き死んでも蘇ることのできる英雄が普通の人間の女性と結婚し、自分とは違う儂い人間の命に涙するという、どこかの神話をアレンジした童話だ。

今日は分厚い雲が空を覆い、空気がじめつとしているためかやる気が起こらない。

リュウジは静かに班員たちの意見に耳を傾けていた。

リュウジがいる五人の班には、幸い活発に意見を出す人物が二人ほどいる。

そのためリュウジは彼らの質問に答えたり意見に同調したりして、どうにか話し合いをやり過ぎそうとしていた。なんといっても面倒くさいからである。

「そうね、やっぱり作者が言いたいのって命の大切さとかそんなじゃない?」

「やっぱりそのへんの答えになるよな」

「はいはい! 奥さんが亡くなるシーンで生まれ変わったらまた会いましょって言うけどさ、それって輪廻転生を表していると思うの」

無難に話し合いがまとまろうとしていたとき、班員の高野由美が新提案を打ち出した。

「リンネテンセイねえ。高野、なんかそれって宗教じゃね?」

「アハハ! 由美、それなんかすっごい怪しいよ」

おもしろがって反応する他の班員たち。

「宗教、か……」

科学技術が発達し人口が都市部に集中した現代の日本。

人間が妙に自信を持ち、自然への畏敬とか神とか仏とかいう言葉はすっかり胡散臭いものとなり

詐欺まがいの新興宗教のみならず、古くから続く宗教やその用語でさえ現代人にとっては敬遠すべき存在になっている。

正月に神社に詣で、盆に仏前で手を合わせ、クリスマスも祝いながら「自分は無宗教です」というのが当たり前な日本人の姿だ。

「あーもう、輪廻転生は大昔からある言葉よ！ 怪しくなんかないわ」

「あ、そうか。由美の家ってたしかお寺だったよね。そういう言葉にも詳しいわけね」

実家が神社であるとはいえ、つい最近までリュウジも似たような感情を抱いていた。

神も仏も存在しない。それゆえに恵みも祟りもあるはずがなく、自然の仕組みを科学で解き明かした人間が自分たちの力で世界を動かしているのだと、そう思っていた。

しかしここ数日の間に、リュウジがこの日本という国に対して抱いていた世界観が変わりつつある。

「おいおい。高野が俺の家に変な壺とか売りに来ても、俺ぜってー買わないからな」

「ひどいわね。うちはそんないかがわしいことなんかしてないわ」

「じ、冗談だつての」

警察の管轄から外れた霊的な事件。神や妖怪が人の思念を通り現れる『映し神』という関係。そして秘密裏に存在し神と人の橋渡しをしている『神祇省』という組織の存在。

新しく得た知識と経験は、世の中が科学だけで動いているわけではないことをリュウジに伝えてくる。

リュウジはこれまで非合理的な過去の風習としか思っていなかった宗教の世界に、少しずつ入り込みつつあることを自覚した。

「神田君は怪しいって思わないよね、仏教とか」

高野由美たかの ゆみがアーモンドのようにぱっちり開いた目でリュウジの方を見ている。

リュウジは個人での考え事を切り上げ、グループでの話し合いに戻ることにした。

「そうだな。詐欺とかに利用する奴らは悪いと思うけど、基本的にはいいもんなんじゃないか」

「おおー！ 神田君ってばさすがね。そうなの、その人の解釈次第で仏は神にも悪魔にもなりうるの」

大きな瞳をさらに輝かせて由美が喜ぶ。

「心がけと正しい理解さえあれば、仏教の教えは人を強くするわあ、別に勧誘してるとかそんなのじゃなくて、わたしの持論を言

ったのよ」

「へえ、さすがトーキョー育ちは頭が柔軟で理解力があるねえ」

からかいにふくれっ面で反応していた由美がリュウジの理解を得たことによつて笑顔を見せる。

その流れを受けて班員の男子生徒はこんなことを言った。

表情を見る限り、特別皮肉が込められているようには思えない。ただなんとなく言っただけなんだろう。

そうとわかっていても、どこか嫌味が含まれているような気がした。

リュウジは怒りを抑えながら「そんなことはねーよ」とだけ返しておく。男子生徒はやはりヘラヘラしているだけだった。

少し考え過ぎなのかもしれない。転校してから東京がどうとか散々聞かれたりしたわけだし、彼も軽いノリで東京育ちがどうのこうのと言っただけだろう。

「ほらほら、そろそろ結論まとめようよ」

「また時間のある時にお話ししましょう、神田君」

由美が他の皆に気付かれないように、無邪気な笑顔でパチリとウインクをする。

呆気にとられるリュウジを尻目に、由美は授業の議題に戻ってい

った。

何気ない日常の時間がゆっくりと流れていく。

リュウジは宗教がどうだの東京がどうだのということを一旦忘れ、授業に専念することにした。

そしてその日の放課後、心霊研究部にリュウジは再び呼び出された。

窓から覗く灰色の空はとうとう泣き出したようだ。外からはぽつぽつと雨音が聞こえ、時折強い風が吹いて水滴が窓ガラスを叩く。

ただでさえ雨が降って暗い廊下は気味が悪いというのに、貼り出された怪しい掲示を多く見かける特別棟四階を通るのは気が引ける。

リュウジは逃げるように部室に入った。

市内を騒がせる首なしの亡霊たちについて、花梨と綾子が観察を行った結果の報告とリュウジが手に入れた手がかりをまとめて考察しよう。

そんな紀明の提案で、会議の席が設けられたのだ。

参考のためマサにも来てもらう。

リュウジが花梨から借り受けた召喚機器でマサを召し寄せると、紀明はやはり驚いていた。

「それでは、まずはわたくしと高坂さんの調査結果を報告いたしますわ」

昨日と同じように会議ができるようまとめられた机。部屋の奥にはいつのまにかホワイトボードが用意されており、街の簡単な地図が磁石で貼られていた。

マサは空中で寝そべりながら耳を傾けている。

「昨日といい、おとといといい、彼らは五人から十人程度の集団で行動していました。目撃場所はあの住宅街で、二百メートルほどの距離を巡回しているようでしたわ。」

おとといあの小隊を殲滅させたにも関わらず、昨日も同じ場所に彼らは現れています。あの周囲に何か関係があるものと思われま

花梨の発表に合わせ、綾子が地図上の道を赤マジックでなぞる。リュウジがいつも通る通学路を含む狭い範囲を、円を描くように亡霊たちは巡回しているようだ。

京都のように通りが碁盤状であったなら、間違いなく真四角なルートができていたであろう。

「この道を時計まわりに歩いてましたなあ」

「それから、彼らは通行人を見かけても特に反応はしませんでした。例外は結界が張られた場合で、おそらく術者を倒し結界を破ろうと

したのでしょう。おとといリュウジさんが襲われたのはそのためだと推測できます」

「ほう、ということはあの者たちは結界を感知することができるとな」

「……そのようです」

マサの質問が空中から降り注いで花梨はビクリとしたが、冷静に返した。

「歩き回る範囲が狭いのに結界を邪魔に思う。兵隊さんたちにも、帰る場所があるということみたいどすわ」

「なるほど、ご苦労だった」

紀明がホワイトボードから正面に視線を戻し、ずれた眼鏡の位置を調整する。

「ええ、なかなか苦労しましたわ」

「何もしてはらん部長はんには、メロンパンでも買ってきてもらいましょか」

「うむ、我も握り飯を所望する」

赤マジックを置いて綾子が席に戻る。

常々いじられている紀明だが、マサという新たなドSの出現に口をあんぐり開けて固まってしまった。その様子を見て、リュウジの

いたずら心も刺激される。

「購買の営業時間ギリギリだけど、メロンパンは残っているのかねえ？ あ、俺はコロッケパンな」

「四階の部室から一階の購買部へ。まあなんてよい部長なのでしよう。わたくしはミルクティーを」

リュウジの追い討ちに顔を青くしてうなだれた紀明だったが、花梨の一言で瞬間的に生氣を取り戻し、鼻息を荒らげながら立ち上がった。

「まあなんてよい部長なのでしょう」だなんて、明らかに棒読みだというのに。

「よい 部長。う、うむ。そうだな！ よし、今日はわたしのおごりだ。使い走りでも何でもしよう」

すつかり乗せられている。目をらんらんと輝かせて席を立つ紀明の姿に、今更ながらリュウジは罪悪感を覚えた。

だが、罪悪感を超えてツツコミどころが満載なのでフォローする気にはなれず、結局冷めた目で彼を精神的に見下すことしかできなかった。このDMめ。

「フッフ、冗談ぞ。話を進めい」

「『豚もおだてりや木に登る』とは、部長はんのためにある言葉どすなあ」

マサと綾子のダブルDに心を貫かれ席に戻る紀明。

受験に数年連続で失敗した浪人生のごとくしなびた彼にできるフオローは、今のリュウジには思いつかなかった。

いや、仮に名案が浮かんだとしてもしばらくはそっとしておくべきだろう。

「それではリュウジさん。あの時亡霊たちに話しかけた理由など、お聞かせ願えますか？」

「ああ、わかった」

よろよろと紀明が席に戻るのを確認すると、花梨がリュウジを促した。

「俺があのお首なしの連中に出くわした場所にタバコ屋があって、ちよつどそこのおばさんと仲良くなった。で、おばさんが言うにはその旦那さんが首なしの幽霊を『見て』しまったみたいで、それ以来部屋からまる一日出てこなかったらしい」

「なるほど。それで『首なしの幽霊を見ると不幸になる』という噂と関係がありそうと踏んだんですね」

リュウジは首肯する。もし関連があるのなら、噂が語る『不幸』の度合いが判明し亡霊たちが与える影響もわかることになる。

「ただ怖がつてはるだけなんか、それとも亡霊たちが何かしたんかわからんとすなあ」

「でもよ、まるっきり無関係でもないと思うぞ」

「そのタバコ屋さんの場所は、この地図でいうどのあたりなのでしょう」

「この街にきたばっかだし、どうもはっきりとはわからんな」

「ちなみに、前に張った結界の範囲はこんな具合です」

綾子は青のマジックを使い地図に円を描いた。死霊たちの行進ルートを囲むような青い円。ちょうど赤と青の二重丸が地図上に生まれた。

「えーと、結界の南端で俺が出ようとして、そこからちょっと進んだあたりだから……あ！」

「何かわかりましたの？」

「タバコ屋の位置はこの赤い円の南端だ。あいつらはこの場所を基点にぐるぐるまわっていたんだ」

時計回りに歩いていたという綾子の報告も含めて察するに、足軽小隊の行進は南端のタバコ屋から出発し、西、北、東。そして南下してタバコ屋前に戻るというルートのようなようである。

「ふむ、町内を巡り最後には『北東から店の前へ戻る』とな」

マサが漏らした一言に、部員たちの顔色が変わった。

「まさか、鬼門きもんから邪気を運んでいたのでしょうか」

「あの歩き方も、反閉へんぱいか何かの可能性があるな。おそらく邪気の浸透を早めるために」

「だとしたら敵さん、呪術に通じてはるんどすか？　これは厄介になつてきましたえ」

「おい、いきなり専門用語で語られてもわかんねーぞ」

飛び交う『反閉』だの『鬼門』だのといった用語に顔をしかめるリュウジだったが、マサも含めた全員が意味を理解しているらしくうんうんとお互いに頷き合っている。

止むことのない雨の音をバックに交わされる会話。意味が全く解らずに黙って聞いていたリュウジにようやく解説が入る。

「リュウジよ、北東の方角は風水でいう鬼門。すなわち凶方。不幸がやってくる方向だ。お前の実家たる神田明神は江戸城……現代の皇居の位置からすればどこにある？」

「北東だ」

「そう、鬼門である北東から流れ来る邪気を防ぐためにあの場所にあるのだ」

鬼門を制すことは風水の基本である。昔から都市や城を建設する際には必ず鬼門の方角に寺や神社を置いて、その場所に不幸を招くのを防いだという。東京の神田明神の他、京都の比叡山延暦寺などが有名だ。

風水による方位から吉凶を知る概念は武家にも導入され、戦の時にどこに陣を張るか、どこに城を建てるかなどを決めるうえで重要視されていた。武将であるマサが風水に通じているのはそのためである。

「亡霊たちは鬼門の方角から店に向かいました。自らの歩みと死者の穢れにより、邪気を意図的に流していた可能性が生まれます。それを加速するために、反閉と呼ばれる呪術的な歩行をしていた。という予想もできますわ」

「呪術的な歩行？」

歩みと呪いという組み合わせにリュウジは首をひねる。呪術といえば呪文を唱えたり印を結んだりといったイメージしかなかったからだ。

「ええ、もとは道教や陰陽道に由来します。独特のステップで地霊を鎮めたりする儀式が発展して、呪文唱えたりするのと同じくらい重要な動作になっているんですえ」

相撲で踏まれる四股や、歌舞伎や狂言で使われる足運びなどこの反閉が由来しているという。

こういった武道や芸能に使われる足捌きは総じてすり足と呼ばれ、反閉が呪術以外の分野に溶け込んだうえでの形なのである。

「フッフ、剣道のすり足も反閉が由来ぞ。覚えておくがよい」

左足をほとんど右足の前には出さず、前後の体重移動で一気に相手との間合いを詰める剣道の足捌き。

リュウジの身体に染み付いたその動きが理解を早めた。

合理的な動きの中にも、勝利を祈る気持ちが含まれているのだからか。

生気を失って無気力に歩く亡霊たち。特にその歩みに注目してこなかったが、それが呪いの効果を持っているのなら事態は深刻だ。

「鬼門の方角と反閔の持つ呪術的效果を合わせて、亡霊たちがタバコ屋の旦那さんに不幸を与えている。彼らの目的などは未だわかりませんが、そのようなことをしているのであれば放つてはおけませんわ」

「ああ、散々怖がらせた上に呪いとはひどすぎるぜ」

「あの幽霊たちが反閔を用いているかは憶測の域を出ないが、鬼門の方角を通っていることは確実だ。昨日皆が調査をしている間あの土地そのものにいわくがあるか調べてみたが、特にはない。意図的に不幸を起こしているのだろうか」

「あら、ちゃんと仕事してはったんですか」

「意外そうにするな。わたしはいつでもこうして情報を集めているぞ」

話をまとめたはずが邪険にされる紀明。歩くどころか、ぴくりと動いただけで棒にあたってしまいかわいそうな犬のように思えてくる。

「少し話は逸れるが、よいか？」

顔を赤くして反論する紀明を無視してのマサの発言に一同が頷く。紀明も慌てて口を閉じた。

「彼の者たち、刀の扱いが妙だと思つてな」

今度は花梨と紀明が首をかしげる番だった。綾子には何か思い当たる節があるようで、マサが話を続けるのを黙って待っている。

「柄を握る手には力が入りすぎであつたし、動きも大きすぎる。あまりに不自然であつた」

「けどよ、足輕兵はほとんどが出稼ぎの農民だつたらしいぜ。子供の頃から剣の稽古を受けてきた侍のお前からしたら、下手くそなのは当たり前なんじゃないか？」

経津丘に国があつたのは、北条や武田が勢力争いをしていた戦国時代初、中期のことである。

兵農分離が行われるかなり前の時代であり、農夫が武器を持って戦に出かけるのが一般的だつた頃だ。

リュウジはそんな農夫たちであるならば、出鱈目に剣を振り回すのも自然なことだと考えていた。

「そうかも知れぬが、何かが引つかかる」

「言われてみれば、兵隊さんたちはあの動きに慣れてはつたようにも見えましたなあ。まるであんな『型』があるみたいでしたわ」

綾子の指摘に、マサも納得したように頷く。

「うむ。大太刀や長巻きのごとく、さらに重い武器を振るような動きであったわ」

「重たい武器から軽い普通の剣に持ち替えて、でもそれを使いこなせていないってことか？」

「そうだ。解せぬことではあるが立派な事実だ」

「折角情報が増えたというのに、かえって相手の正体がわからなくなってしまうましたわね」

花梨のため息に、一同は口をつぐんだ。

戦国時代の足軽の亡霊であり、タバコ屋の旦那さんに呪いをかけようとしている。農夫か傭兵という出身でありながら呪術に通じた可能性があり、重い武器を使うようなフォームで戦う。

得た情報を組み合わせてもそれぞれが噛みあわず、どのようにあの亡霊たちという接点で交わったのか見当もつかない。

「これまではチラチラと姿を見せるだけと思われていたが、この先は直接的な被害が出る恐れがあるな」

紀明が眼鏡を押し上げながら言った。

その表情は真剣そのものであり、今回は誰も彼を茶化さず、皆雨音を聞きながら彼が再び口を開くのを待っていた。

「金剛院君、高坂君。この雨の中悪いが早速例のタバコ屋の周辺を調べて欲しい。」

神田君にマサさん、貴重な情報を感謝する。入部のことも前向きに考えてもらいたいところだが、事態が深刻化している以上こちらも返答を急かしたりはしない。じっくりと考えてくれたまえ」

リュウジが初めてこの心霊研究部を訪れた時さながらの貫禄を放つ紀明。

その重みのある言葉に、リュウジは事件のこの先が気軽に関わってよいものではないということを実感した。

旦那さんが倒れたことによつて悲しむおばさんを放っておけず、つい首なしの亡霊たちに話しかけるといふ危険を犯してしまった。

そしてここまで知ってしまった以上、この恐怖の現象を見過ごすわけにはいかない。そう思う強い気持ちがある自分の中に芽生えていることは、はつきりとわかっている。

それもまた事実なのであるが。

これまで必死に打ち込んできた剣道ができなくなった。その後不思議な体験をし、さらにはその不思議なことを主な活動内容とする心霊研究部から勧誘を受けた。

怪奇現象への興味が湧いていた矢先、それは願ってもない申し出である。

それに今回を含めて二度入っただけの部室だが、リュウジにはとても居心地が良い場所になっていた。

都会からの転校生である自分は、未だクラスでは好奇の目でしか見られていない気がしているし、対する自分も気構えが抜け切れていない。

それに対し心霊研究部メンバーたちの方が、気楽に接することができるように思っていた。

街が危険にさらされている中不謹慎であっても、これらの理由がリュウジの入部希望を後押ししていたのだ。

このままの勢いで入部しようかと考えていたリュウジだったが、ひとつ冷静に考える必要があるようである。

「わかった、もう一回じっくり考えてみる」

「それがいい。活動内容が危険になる可能性も高いからな」

紀明に促されて花梨と綾子、そしてリュウジは部室を出た。

特別棟四階の廊下は雨だというのに電気が点けられておらず、薄暗さがこの空間の胡散臭さを倍増させていた。

気の弱い生徒なら絶対に通るのを敬遠するだろう。

「さて、調査開始ですわね」

「なるべく早う兵隊さんたちのこと知らんとな。旦那さんに何かあ

「つてからでは遅いどす」

「俺も行くよ。ちょうど帰り道だし、おばさんと知り合いの俺がいれば聞き込みも楽になるだろう」

「よろしゅう頼みます」

オカルト系の部活が張り出した掲示物で壁が埋め尽くされた廊下を、三人は勇んで歩く。

「我はそろそろ神田家へ戻ろう」

ふわふわと浮かびながら後ろをついてきていたマサだったが、ふと足を止めた。

リュウジが振り返ると、マサはいつものように微笑を浮かべている。

「また何かあれば我を呼ぶといい」

「ああ、皆にも俺は元気だと伝えてくれ」

「承知した」

マサはそれまでそこにいたのがウソのようにふっと消えた。まったく幽霊とは便利なもんだとリュウジは再び前を向く。

階段を下るとちゃんと電気が点いていて、文化部員たちは生き生きと活動していた。いい意味でも悪い意味でも、この階段は非日常との境目なのかもしれない。

雨粒が傘を叩き、ぱらぱらと音がする。

曇り空の下に広がる住宅街はリュウジに結界の中を連想させた。  
雨のため人通りがいつもより少ないからなおさらだ。

「もうすぐ着きますが、今日は靈気を全然感じませんわね」

「ほんまどすな。もうこの場所を離れたんやろか？」

綾子の言葉通りであればよいのだが。亡霊たちについての調査が途切れてしまうのも問題だが、タバコ屋に迫る危険が一時的に去ることになる。

「とりあえず今日はタバコ屋さんへの聞き込みだけに集中しましょう。それだけでも充分何か手がかりが得られるかも知れません」

リュウジと綾子に向けられていた花梨の視線が、ふいに斜め下へと落とされる。

「今日はリュウジさんが着いてきてくれて、その、本当によかったです」

「ほんまやわ。うちらは心靈研究部や言うて人様の家の事情聞くわけにもいかんからなあ」

二人が温かいまなざしを向けてくれる。いつも首なしの亡霊たちと出会うときに感じる異常な寒気をおぼえることも今日はない。

心霊研究部室で亡霊たちに関することを挙げていったときは彼らの得体の知れなさに恐怖したが、今日の調査は穏便に済みそうだ。

リュウジは元気に自分や日野に話しかけるおばさんを思い出した。

タバコ屋までの距離は、すでに五十メートルを切っていた。雨は相変わらず傘を打ち続けており、まだまだ止む気配はない。

春先の雨であるが空気を冷やすことはなく、むしろ梅雨時のように生暖かい気温である。分厚い雲が太陽を隠してはいたが、不思議と不安を覚えることはなかった。

リュウジはそんな空気に、どこか懐かしいものを感じていた。田舎のおばあちゃんの家遊びに行ったときのおいのような、ぼんやりとした懐かしさ。

良い気分浸っていたリュウジだったが、二人の様子がおかしいことに気付いた。花梨も綾子も顔を引きつらせ、深刻になっている。

「おい、どうかしたのか？」

「この香りは……」

「護摩、それにお線香……でしょうか」

そう言われリュウジもようやく空気中を漂う匂いの正体がわかった。この懐かしく、そして優しい香りは紛れもなく仏前で焚かれる

線香のものである。

三人は自然と歩みを止めていた。閑散とした住宅街にはただ雨の音だけがあり、砂嵐が映りノイズが流れるテレビのような虚無感を三人に与えてくる。

「……………行きましょう」

喉の奥から搾り出すように出された花梨の提案に頷き、再び歩き出す。

今更ながら真実を知ることが怖くなってきた。足取りは重く、逆方向へ逃げ出してしまいたいという衝動に駆られる。しかしリュウジは自分がすでに、後戻りのできない領域にまで踏み出していることをわかっていた。

ようやく着いた店に人の気配はなく、「忌」と書かれた白い紙が貼られたガラス戸から覗く店内の明りは消えている。

店の前で立ち尽くす三人が目にしたのは、少し離れた位置にある公民館だった。

普段なら住宅街に自然と溶け込んでいるはずの地味な建物は飾りつけられ、喪服姿の人々が悲しくも厳かに出入りしている。

「そんな、嘘だろ。なんでなんだよ」

通夜の行われている公民館を見ていると、すすり泣きと読経がここまで聞こえてきそうな気がしてくる。

一足遅かったのだ、何もかもが。亡霊たちの怪しげな行動に気付くことも、タバコ屋が狙われていたと察知することも、すべてが。

降りしきる雨の音は、何もできずに呆けてばかりのリユウジをせせら笑うかのように単調に鳴り続けている。

雨は次第に粒を大きくし、傘を打つ音も次第に激しくなっていく。白い光が天を駆け抜け、遠くで大太鼓を叩いたような遠雷の低音が響いた。

誰もが発言をためらいその場を動くこともできなかったが、リユウジが静かに口を開いた。

「なあ、二人とも。こんな時に悪いんだが、一ついいか」

顔を蒼白にして俯いたままの花梨に、切れ目を悲しそうに見開いてこちらに視線を向けてくる綾子。

「俺、もうこんなのは嫌だ。もしこんなことが続くんだったら、俺の手で止めたい。だから……」

言葉は決まっていた。

「俺を、心霊研究部に入れてくれないか。もう黙って見てる気も、中途半端に齧るつもりもない。俺もお前らみたいにいるいろいろ知ってこの街に起こっていることを完全に突き止めて、繰り返さないようにしたいんだ」

下を向いていた花梨がようやく顔を上げ、彼女の涙がたまった大きな瞳をあらわにする。涙をこらえるように引き結んだ口元が開か

れた。

「……わかりましたわ。もし次があるというなら、わたくしたちが一丸となって止めましょう」

「よろしく頼む」

マリンプルーの瞳は潤んだままだったが、花梨の口元は笑うようにほころんでいた。綾子も優しく頷いている。

「さて、三条部長からあなたに渡したいものがあり、それを今わたくしの家で預かっているのですが……この後お時間を頂けないでしょうか」

「ん？ おまえん家？」

「花梨ちゃんの家、リュウジはんびつくりしはるやろうなあ」

「そんな豪邸なのか？ そっぴやお前、貴族の家系がどこのごこの言っただもんな」

「そんなにすごいものではありません。それよりも来ていただけるのですか？」

「ああ、引越してからは一人暮らしだし、多少遅くなっても誰も文句言わねーからな」

「手間は取らせませんのでご安心を。それに、新入部員が深夜徘徊で警察に補導されても困りますからね」

「あー、確かに制服じゃまずいか」

三人はもと来た道を引き返していた。

リュウジの住むマンションが学校の南側に位置するのに対し、花梨の家は学校の東側にあるからである。

だいぶ慣れてきた普通の通学路だが、こんな時間帯に学校の方へ向かうことは珍しく、リュウジは新鮮な気分になっていた。

途中で家が西方面にあるという綾子と別れ、リュウジと花梨は東方面へ向かう。

引越してからすぐに学校が始まり、その後霊的事件に巻き込まれてばかりだったリュウジは家と学校の間しか経津丘市を知らない。

東方面には何があるのか楽しみになってきた。

「東方面はそこそこ発展しておりますわよ。東京と比べられても困りますけどね」

住宅が密集し道幅も狭い南地区を抜けてしばらく歩くと、花梨の言う通り大きな国道が。そしてその道沿いにたくさんの量販店が見えてきた。

スーパーやコンビニはもちろん、全国チェーンのファミレスや回転寿司。本やゲームの中古店に服飾店と、なかなか華やかな様子を見せている。

「へえ、前にクラスの連中がバイトがどうとか言ってたけど、こっ

ちにならバイトのできそうな店がたくさんあるな」

「あら、アルバイトを始めようとしていらしたの？」

「最初は剣道部に入ろうと思ってたけど、廃部になりそうだからやることがなくなったから、何をしようかいろいろ考えてた」

「たしかに、去年の秋頃からまったく活動をしておりませんわね」

「ま、今は心霊研究部があるけどな」

「うふふ、先輩として容赦しませんわよ。みっちり指導して差し上げます」

花梨が、まるで紀明でも見るように意地の悪い視線を向けてくる。

紀明のような扱いを受けるのはごめんだが、花梨自身にもけっこうからかい甲斐があったりするのです、来るなら来いとリュウジも不敵に笑った。

リアクションの大きい花梨にちょっかいを出すのはなかなか面白いし、いざという時はクロワッサンと言ってやればよいのだ。

国道沿いの歩道は傘を差して二人並べばもう塞がってしまうほど狭かった。

しかし他に通行人も見当たらず、リュウジと花梨はのんびりと世間話をしながら歩いていった。

時折後ろからやってくる歩行者を、どちらか（主にリュウジ）が

道を開けて通せばいい程度だ。

やがて二人は国道を逸れ、狭い道へと入っていく。こちらでは個人経営の美容室や喫茶店などがちらほらと見受けられた。

南地区に比べると全体的にオシャレで、こざっぱりとした印象を受ける。

「さて、着きましたわよ」

「……すげえ」

案内されたのは一般家屋を四つほど組み合わせたような大きさをした洋館だった。

木造の外壁には白いペンキが塗られ、二階には広めにとられたベランダがある。

ドアの金属部品に金メッキが施されていたり窓枠に小さな装飾があったりと、シンプルながら上質な古さと高級感が演出されており、そこに成金臭い無駄な派手さはない。

「わたくしの金剛院家がこの街に赴任した、明治の後期に建てられたものです。床が軋む場所があったりもしますが、わたくしは気にいっておりますわ」

「明治時代か。どつりでレトロな造りをしているわけだ」

西洋的な建物であるというのに、屋根だけが瓦葺なのも当時を彷彿させる要素である。

「さ、雨の中歩いてきたのです。どうぞあがってくださいな」

板チョコのような洋館の扉を押すと、目の前にはオレンジ色の光が広がった。

蛍光灯の白い光に慣れたリュウジには珍しい。

同じ電気の明りではあるようだが、館の雰囲気を変えないようにあえてランプのような色のものを使っているのだろう。

年季の入った木の床はニスで塗られ、ベージュの壁紙にランプ風の照明。

古いカフェかホテルのような歴史を感じさせる光景は光の色の効果もあり、リュウジはまるでセピアカラーの写真の中にも入ったように思えた。

「おや？」

戸口から続く廊下に人影が見える。黄色い花柄の着物の少女と、黒いスーツを着た銀髪の壮年男性だ。

二人は顔を見合わせ頷きあうと、少女はこちらへ、男性は奥へとそれぞれ向かった。

「お帰りのさい花梨お嬢様。それにようこそいらっしやいましたお客様。確か、以前に亜空結界の中で倒れていらっしやった方ですね」

おかつば頭をおじぎさせて挨拶をしてきた彼女。前に鬼と一緒に

花梨が召喚した子だ。たしか名前は……。

「神室姫、応接室に二人分のお茶をお願い」

「かしこまりました。緑茶は玉露から紅茶はアールグレイ、珈琲はキリマンジャロまで、なんでもご用意いたします。なんなりとご注文を」

そうだ、カムロヒメだとリュウジは思い出す。

真つ直ぐにこちらを見上げてくる神室姫に、とりあえずリュウジは注文をすることにした。

「そうだな。苦いのは嫌いだし、麦茶とかあるか？」

お茶受けにクロワッサンなんてどうだろうとすっかり口が滑りそうになるのをリュウジは堪えた。

もっとも、神室姫が冗談の通じそうな相手ならばいつかこのネタにも笑ってくれそうなのだが。

「むー……それは夏限定メニューなのです。いじわる」

ぶつと頬を膨らませる神室姫に、花梨が苦笑する。

「かわりに温かいココアでも用意して差し上げなさい。さ、応接間へ案内いたしますわ」

優雅に身を翻してリュウジを先導する花梨。もう少し身長があればハリウッド映画にでも出演できそうなほど決まっていた。

いそいそと厨房へ向かう神室姫を見送りながら花梨に続くリュウジ。

本格的に欧米スタイルをとっているようで、玄関先で靴は脱がない。木の床が靴を受けてコトコトと乾いた音をたてる。

「さあ、こちらです」

真鍮のドアノブを捻ると、赤いクッションのソファーと立派なテーブルが印象的な応接室の景色が目飛び込んできた。

「おかけになってお待ちを。わたくしは部長から頼まれたものを取って参りますわ」

花梨と入れ替わるように、トレイに飲み物を乗せた神室姫が入室してくる。

「お、お待たせいたしました」

「いや、普通に早いじゃんか。すげえぞお前」

「ホントですか!」

丸い顔を林檎のように赤くして喜ぶ神室姫。かちやりと音をたてて、ココアの入ったカップがソファーに座ったリュウジの前に置かれる。

「もしかして、何分以内に用意できなかつたらお仕置きとかそんなペナルティがあるとか」

「うふふ、ここはそんなブラック企業ではございませんよ。紅茶の方は花梨お嬢様がお帰りになる時間帯にはいつも用意しております。それにわたくしはなんというか、金剛院家の皆様の指示を受ければそればかりになっってしまうもので」

リュウジの向かい側にミルクティーのセットを用意しながら話す神室姫に、リュウジは疑問を覚えた。

「なんかロボットみたいじゃねえか。つてかお前、こないだ鬼と一緒に召喚されてただろ。お前つてもしかして……」

「ええ、人ではありませんよ。命を吹き込まれた紙切れです」

質問をためらっていたリュウジに、神室姫は平然と笑顔で答えを示す。そこに嘘や我慢の気配はなく、心から幸せそうに言っているようだった。

「たしかに昔は、完全な召使いとして、心のない作業員として扱われてきましたし、わたくし自身にも感情なんてありませんでした。

けれどこの館が建てられた頃でしょうか、花梨お嬢様のお爺様とお婆様にあたるお方がたいそうわたくしをかわいがってくださいます。わたくしもまた心というものを少しずつ理解していったのです」

「最初は本当にロボットみたいだったのか」

心を込めて使い続けたモノには魂が宿るというが、紙人形が心を持つこともあるのかとリュウジは納得した。

「当時は人間同士でも召使いと華族という身分差があるなかで、式神のわたくしを大事にしてくれましたから。なおさら金剛院の家が好きになりました。」

花梨お嬢様に至っては、まだまだ未完成なわたくしの心をよく気にしていただき、なんとしががない紙切れのわたくしを映し神にしてくれたのです。そこに心酔します、うっとりしちゃいます」

うれしそうに話し続ける神室姫の姿は微笑ましく、本物の人間であるかのようだ。

中国の仙人や日本の陰陽師が使役したという絶対服従の使い魔『式神』であるようにはとても見えない。

神室姫の話から察するに、金剛院の一族は何百年も前から彼女を女中として雇っているようだ。

リュウジは花梨の家がただものではないことを今更ながらに実感した。

そもそも普通の華族（貴族）の家系であるならば、明治時代にこんな地方に飛ばされることはなく東京の中心で議員をしていたはずであるし、左遷されたとしたらこのような立派な館を与えられるはずもない。

今でいう県知事のような職についていたのか、それともやはりオカルト的な何かが関係しているのだろうか。

リュウジが思わず首を傾げそうになったところに神室姫が口を開

いた。

「花梨お嬢様のこと、よろしく頼みますね」

その満面の笑みを写真で見たならば、誰しもが一点の翳りもなく  
思えるであろう。

しかしリュウジには、何か言いようのない憂いが一点、その顔に  
混じっているように思えた。

ドアの金具がわずかに軋む音がして、花梨が応接室に戻ってくる。

スカートを優雅に翻してリュウジの向かい席にふわりと腰掛けた。

「遅くなりましたわね」

「もうお嬢様。お茶が冷めてしまいますよ」

「うふふ、ご苦労ですわ神室姫。少し込み入った話になりそうです  
ので、席を外していただけるかしら」

「あら、込み入った話ですと！ あらあらあお嬢様いけませんよお。  
殿方呼び出したかと思えば。あんいきなり……」

紀明を見るときの綾子のような薄笑いを浮かべ、妙に色っぽい口調  
になった神室姫に、一瞬で花梨は両目をつり上げ頬を紅潮させた。

頭のクロワッサンが炎を上げんばかりの熱気が巻き起こり、乾燥  
した熱風がリュウジの顔面に吹き付けた ような気がする。

「こ、これは極めて真面目な、真剣極まりない話ですわ！ いいからさっさと部屋を出なさい」

「かしこまりました。わたくしはこれよりディナーの仕上げに参ります」

おかつぱ頭をぺこりと一礼させ、もう一度いたずらっぽく笑って神室姫が退出する。

リュウジの向かい側に座った花梨はカップにミルクと砂糖をトッピングしてスプーンでかき混ぜる。

一口啜ると落ち着いたようで、花梨は頬に赤みを残しながらも冷静な顔つきに戻って、ソファの後ろに置いていたものを取り出した。

「先ほどは失礼を……まずはこちらです」

それはリュウジには見慣れた竹刀袋だった。黒い皮製のタイプで、釣竿や野球のバットを入れるケースとよく似ている。

大きめの袋状のものと比べると収容本数は二本だけと劣るが、肩から提げるためのストラップもついているため持ち運びには優れた品である。

中には一振り竹刀が納められているようだが妙に薄い。

それにケース自体が若干短いようにも見える。花梨は留め金を外すと中のものをゆっくりと取り出した。

「どうです？　あなたが扱いやすいように高校生用の竹刀とほぼ同じ寸法に拵えたのですよ。重いので少し短いですが」

「嘘おっ！」

竹刀袋から取り出されたのはなんと、本物の日本刀だった。

竹刀のケースに入れてもおかしくないようにか反りはなく鰐もついでいないのだが、柄に鮫皮が巻かれ漆の塗られた鞘に納まったそれはどうみても刀である。

「いつまでも目を丸くしているではありませんことよ。肝心なのは刃部なのですから」

そう言って花梨は刀の柄に手をかけた。

「ま、待て！　危ないぞそんなもん」

「ではあなたが抜いてください。これからはあなたが扱うものなのですから」

初めて目にする真剣をうろたえながら受け取るリュウジ。

ずっしりとした鋼の感覚が手にのしかかる。おそろおそろ刀を抜くと鏡のような輝きが目に飛び込んできた。

「すげえ」

刃渡りは七十センチほどはあろう。反りのない直刀であるためか江戸時代以降の打刀に比べればわずかに長い。

真つ直ぐな日本刀といえば杖などを鞘とした仕込み杖刀が有名だが、この刀は真つ直ぐであることを除けば普通で、特別細く作られているわけではない。

むしろ鍔がなく、長めに拵えられた忍者刀といった具合か。

「刀身には魔を祓う呪文が彫られています。これで切り付けられれば、あの亡霊たちもただでは済まないでしょう」

「おいおい、俺が持ち歩くって言われてもな、これって銃刀法違反じゃね？」

「大丈夫です、使用するのは亜空結界の内部だけなのですから。普段は経津丘高校の剣道部員として涼しい顔をしていればよいのです」  
「なるほど。竹刀っぽく拵えたのは扱いだけでなく、カムフラージュのためってのもあるのか」

居合刀を収容するための反りのあるケースなども存在するが、高校で居合道というのはあまり一般的ではない。

少なくとも経津丘高校には居合道部なんてないわけだし、竹刀のように見える方が人の目にはつかないだろう。

「それから、次はこれです」

今度のものはすでにリュウジも見慣れていた。あの音楽プレイヤー型の召喚機器とイヤホンである。

「古来からの呪術と最先端の科学の結晶と言えましょう」

「映し神か、不思議な存在だよな。そういえばお前、俺がマサを呼んだときにノリトがどうのとか言ってたが、ありや何なんだ？」

「いくつか疑問があたりのおようですね。それでは順を追ってこの機器と映し神について説明していきましょか」

花梨はそう言うと紅茶を一口飲み、召喚機器を手にした。

以前見せたように右のイヤホンを右耳に、左のイヤホンを口元にあてている。

「マサさんもおっしゃっていたように、映し神は人間の思念を通じて召喚者のもとに現れます。この機械は人間の内面である精神世界と現世をつなぐ役割を果たすのです。そのために、耳にあてた右のイヤホンが脳波をキャッチします。そして召喚者が相手の映し神をきちんと理解し、その姿を鮮明に思い浮かべる。こうして思念の道が形成されるのです」

思念の道。その言葉から、リュウジは気絶した時にマサと共に見た謎の廊下を思い出した。

得た知識とこれまでの記憶が複雑に絡む人間の思念を、映し神となるまでに絆を深めた神霊たちは真つ直ぐに進むことができる。

召喚時に映し神を想うように、映し神たちもまた召喚者を理解しているからこそ成しえるのであろう。

「そして、精神世界と物質世界の扉を開く鍵。それこそが、神に奉

げる言葉である祝詞のしとです。左のイヤホンにそれを吹き込むことによつて、はじめてこの境を越えられるのです。これは妖怪や幽霊を召喚するときとて同じ。人間が映し神を呼ぶときの約束の言葉なのです。事前にこういった取り決めもなしに召喚をした。あなたとマサさんは、よほど深い絆で繋がっているのでしょうかね」

「たしかに、ちっちゃい頃からあいつに剣を教わってきたからな。それにあいつも家族の一員で、なんというか、師匠と兄ちゃんを兼ねてる感じかな」

なるほどと頷きながら花梨はイヤホンを外し、召喚機器をリュウジに手渡す。

「なかなかわかりやすい説明だったぜ、センパイ。マサを呼んだあの時もやぶれかぶれで、頭では何も理解していなかったからな」

「うふふ、心霊研究部員として覚えておかなければならないことはまだまだたくさんございますわよ」

同級生ながら先輩という響きを気に入ったのだろう。花梨は満足げにコロコロと笑った。

呪文の彫られた刀に召喚機器。

タバコ屋での悲劇を繰り返さないためにも、街を騒がせる亡霊たちの謎を解明し、彼らを止めなければならぬ。

リュウジは激しい戦いの予感を覚え、受け取った召喚機器を強く握り締めた。

「なあ、嫌だつたら答えなくてもいいんだがな、お前　いやお前ん家つて一体何者なんだ？　何百年も生きる紙人形が働いていたり、召喚機器があつたり。いろいろと疑問なんだが」

質問を受けた花梨は押し黙り、応接室が静寂に包まれる。

年代ものの柱時計が刻む乾いた音が時間の経過を告げていた。

「ごくりと唾を飲み込む音さえも相手に聞こえてしまいそうなお中、花梨が口を開く。

「……金剛院家は、代々続く神祇官の家系。明治の頃からこの経津丘を守護するよう命じられた一族なのです」

「神祇官つて、もしかして神祇省の」

「ええ。古来より都に住んでいた貴族の系譜は、帝のもつ天津神の血を多かれ少なかれ受け継いだ存在。ゆえに歴史にその名を一切残さず、その強い霊力を駆使して神祇官として祭事を担当する一族が多く存在するのです」

源氏物語などにもそのようなシーンがあるが、昔の天皇は跡継ぎを絶やさないように数多くの妻を娶ったという。

藤原氏や源氏、平氏のように天皇家と強い交わりを持ったり、枝分かれしたりした貴族や武士の家系は枚挙に暇がない。

金剛院の家系にも皇族の流れがあり、一族の者はそのためか強い霊力を持っているようである。

「明治維新の頃より、政府は迷信的な分野を民の目にさらすことなくすべて裏で片付けるといふ姿勢をとり続けました。神祇省の組織が固まった頃、金剛院家がこの地の守護として派遣されたのです」

「ってことは明治時代にはすでに日本全国に神祇官が駐在していて、それぞれの持ち場を靈的に護っていたってことか？」

「ええ……」

説明し終わると花梨は突然うつむき口を閉じてしまった。

斜め下に落とされた視線は特別何かをとらえているようではなく、マリンプルーの瞳が虚ろにくすむ。

「それなのに……わたくしは救うことができなかった」

「おい」

「あの場所が狙われていると知りながら、わたくしは　何が神祇官でしょう。何が靈的な守護でしょう！」

こぼれ落ちそうなくらいに大きな両目から、じわりと滲み出た涙。

「金剛院家が　わたくしが憎くなったでしょう。偉そうなことばかり言っておきながら、結局は役立たずの飾り物なのですから」

「待てよ。そりゃ俺だって今回のことは悔しい。けどよ」

葬儀の様子を目の当たりにし、助けようとしていた人を助けられなかったことを知ったときから心に重くのしかかっていたもの。

「心霊研究部に入りたいつて俺が最初に言ったとき。正直、ただの高校生の心霊研究部なんかにはそんなことできるはずがない、また半端に関わって犠牲者が出るのを繰り返すだけなんじゃないかって少し不安だった」

それがわずかに軽くなったのだ。

「でもお前が神祇官の家系だつて知ったときに、ちょっと安心できたんだよ。ちゃんとした専門家が俺たちの仲間にいるつてことがわかったし、お前がそんなになるまで真剣にこの街のこと考えてるつてことも知ってる」

呆気にとられたのか、見開かれた双眸は力なくこちらに向けられて、小さな唇がわずかに開いていた。

「あなた……」

「それにお前言つてたろう。『もし次があるというなら、わたくしたちが一丸となって止めましょう』つて。高坂も紀明もいるし、俺も微力ながら手を貸すしよ」

青ざめていた花梨の顔に、仄かに熱が戻ってくる。

「俺もそうだし、きっと他のみんなもお前のことを結構あてにしてると思うぜ。だから元気だせ」

「ええ。……その、ありがとうございます」

再び俯いた彼女の顔は赤らんでいて、生気が戻ったように見える。

レトロチックなオレンジ色の明りは、花梨と始めて出会ったあの夕焼け空の下の柔らかな光をリュウジの記憶から引き出していた。

花梨の頬は緩められ、細くなったマリンブルーの瞳に映る悲しみは完全に隠されていた。

## 断章 2

憎い、憎い……。

強い怨嗟の念は禍々しい炎となって全身にまとわりつく。

全身にたぎる血と、湧き上がる熱。

こめかみに矢を受けて馬上から落とされた男はすぐさまその首を奪われ晒し者となったが、怨念はその生をつなぎとめた。

いや、生も死もあてはまらぬ怖ろしい存在へと彼の身を変化させていたのである。

男の魂を慰めるため塚が立てられたが、その周辺では天変地異が巻き起こった。人々はそれを祟りと呼び恐れおののく。

怨霊と呼ばれた彼は、憎しみに身をゆだねたまま三七〇年の時を過ごした。

塚の周囲は祟りを恐れ誰も近づかなくなり、土地は荒れていた。申し訳程度に置かれた供物もそろそろ傷み始める頃で、塚そのものもだいぶ砂埃をかぶっている。

漂う空気は重苦しく、怪談話で伝えられるような生臭い風でも吹いてきそうである。

その日は曇天で、黒に近い灰色の雲が一層周囲の不気味さを加速させていた。

「よう、お前だな？ 嵐や日照りを起こしているって怨霊は」

自らを鎮める塚の側で休んでいた男に、野太く力強い男の声がかかる。男が声のする方を振り向くと、そこにはたくましい体つきの戦士が立っていた。

古墳の埴輪のような鉄板の鎧を着崩し、角髪みずらと呼ばれる古代の髪型をしたその戦士は人懐こく笑っている。一見親しみやすそうに見えるが、どこか神々しい雰囲気をつけていた。

「その姿……どこぞの神か？」

「おうよ。俺はオオナムチ。出雲の王オオクニヌシと名乗った方がよかったか」

あまりに堂々としたオオナムチの態度に、男は不機嫌そうに顔をしかめた。

「西の最果ての神が、こんな東の果てに何の用だ」

「たしかに本殿は出雲大社だがよ、俺は全国で信仰されているもんでな。この関東にだって、俺を祀る神社は山ほどある。俺が西にしようが東にしようが、そりゃあ当然のことだ」

この地は自分が護るとでも言わんばかりの不敵さを、男は挑発と受け取った。

「ほう。記紀神話の英雄が、怨霊たる我を退治しに来たとな　面  
白い」

因幡の白兔を助け、地底の王スサノオの試練に打ち勝ち、持ち出した剣と弓で地上の王になったと言われる英雄神オオナムチ。

神話の時代よりその名を轟かせる戦士の登場に、男は恐怖するよりも先に胸の高鳴りを覚えた。

「武士の血が騒ぐわ。神と刃を交えるとは武人の誉れよ！」

「お、乗り気じゃねえか怨霊さんよ」

分厚い胸板を拳でドンと打ち鳴らし、オオナムチは気合を入れて一振りの剣をその手の内に召喚する。

古代の直刀はリーチこそ短いが肉厚な刃をもっており、長いながらも薄い男の刀とは対照的だ。負けじと男も腰の刀を抜き放つ。

口元を片側だけつり上げて獣じみた笑みを浮べる男に対し、オオナムチの笑みはやはり人懐こい。

「医術と農耕を司り温和なことで知られる出雲王が、武による勝負を所望とな。後悔するでないぞ」

「誰が後悔するもんかよ。義父スサノオに鍛えられた国津神の王たる俺が、ただの怨霊なんかじゃ負けねえって」

「ほぞけー！」

咆哮とともに、男は刀を脇に構えて地を蹴った。

逆袈裟に振り上げられた刀は閃光を放ちながら神を捕らえようとするも、オオナムチは鎧を着崩した利を活かして身軽に避ける。男は返す刀で再びオオナムチに切りかかった。

「真っ直ぐな太刀筋だ。正々堂々、もののふの道に則って国を護ろうとしたお前の生き様がよく出ているよ」

男の剣先が描く三日月を幾度とかわしながらオオナムチが眩く。だがしゃにむに剣を振るう男の耳にその言葉は入っていなかった。

「ぬおお！」

大上段から振り下ろされた男の刀がついにオオナムチに焦点を合わせる。

身を翻す余裕のなかったオオナムチは慌てて片手剣でその一撃を受け止めた。

刀身が火花を散らせ、鏝迫り合いは両手持ちの刀を使う男が有利。オオナムチは押されて体勢を崩すも、後退して男と大きく距離をとった。

刀の間合いからオオナムチが逃れ、男は悔しそうに舌打ちをしなから刀を構え直す。

「確かに剣は強いじゃねえか。だがこれはどうだろうな？」

オオナムチは剣をしまうと、今度は光り輝く一対の弓矢を取り出

した。

「お前は弓も得意だったというが、こちらから一方的に撃たれちゃあひとたまりもないだろう。こいつは俺が地上の王になるために義父スサノオがくれたもんだ」

白い光を放つ矢がつかえられ、ギリギリと音を立てて弦が引き絞られる。周囲の淀んだ空気がどんどん澄んでいき、張り詰めていくのを男は感じた。

「八十神を従えて王になるための、神殺しの武器、生弓矢だ！」

輝く矢じりは吸い寄せるように男を捕らえて離さない。恐怖とも油断とも違う何か。不思議な力が男の足を止めているのだ。

弓矢の放つ白い光は、まるで時を止めているようだ。

男は再び、自分自身が矢に貫かれる運命にあることを悟った。

視界が閃光に包まれる。男は暖かさの中で、長くおぞましい怨嗟の鎖から己が解き放たれるのを感じていた。

## 第四章

大雨の降った翌日、空には未だ灰色の雲が居座り続け街を不穏な空気で包み込んでいた。

二階にある教室の窓から見える景色が白黒写真のように思えてしまっほどのどんより具合だ。先生の声もどこ吹く風で、生徒たちはあと数分と時計を睨んでいる。

それはリュウジとて例外ではなく、放課後を間近に控えたうれしさともどかしさを必死にこらえながら黒板の内容をノートに書き写していく。

教室の時計が授業の終了時刻である四時を指し示す。

生徒たちの中には教室の時計とチャイム鳴る時間の誤差を覚えている者もいて、やがて教師の耳には届かないような小声で誰かがカウントダウンを始めた。

「いつそチャイムより教室の時計を基準にしてくれりゃいいのによ」

リュウジがぼやいている間にも針は進み、スピーカーからチャイムの音が鳴った。

「はい、今日はここまでにします。きつちりページが終わったから、次のページを予習しておいてくださいね」

先生の言葉を最後まで聞き終わるや否や、生徒たちは帰り支度を始めたり話を始めたりしている。

とりあえず部長の紀明にも挨拶しておくかと、リュウジは心霊研究部室へ向かうことにした。

廊下には傘やコートを掛けておくためのフックが一人一人に与えられている。

リュウジは自分のスペースに立てかけておいた竹刀袋を肩にかけると、特別棟の四階を目指す。

ずしりと重い真剣の感覚は新鮮で、リュウジは初めて竹刀を持って歩いたときのことを思い出した。

こうやって竹刀袋を持っていれば、その人物が剣士であることを言わずとも示すことができ、本人も妙に誇らしくなれる。

以前リュウジの友達がギターを買ったことがあって、彼はギターケースを誇らしげに背負って街を歩いていたことがあったが、リュウジにはその友達の気持ちがなくわかっていた。

「これで俺も、本格的に心霊研究部員か」

ポケットから取り出したイヤホンを耳に当てて階段を上る。

家に帰ったあといろいろいじっていて気付いたのだが、この召喚機器は普通に音楽プレーヤーとしても使えるようなのだ。

オン、オフとSという三つのスイッチがあり、召喚をするときはSに、音楽を聴くときはオンにすればいいようだ。

ロックバンドの奏でる疾走間あるイントロのフレーズが気だるさを晴らし、階段を上る足を軽くしていく。

はたから見れば竹刀と音楽プレイヤー。実際は破邪の日本刀と召喚機器。

「それどころか、本格的に呪術師か何かになっちまったのかな」

マサは亡霊だが家族であり師匠だからノーカウントとして、それまで異形のものたちの存在をまったく認識していなかったリュウジが心霊研究部員として戦国の亡霊たちに挑むことになった。

イヤホンから流れる曲はワクワクするAメロから切ないハーフトーンのBメロに差し掛かる。

神祇省という組織は国民の安全のため、リュウジのように『ちょっと靈感のある一般人』にさえも悟られないように霊的事件を裏で解決してきたのであろう。

その神祇省が動けなくなった今の経津丘市に転校してこなければ、自分はこれまで通りの一般的な生活をしていたはずである。

畳み掛けるようにかき鳴らされるギター、ベースと、連打されるドラムの重低音。壮絶なフィルインをきっかけに、サビに突入した曲はどこまでも伸びていく。

長い階段が終わった。

本物の神祇官がどんな奴らなのかは知らないが、あいつらも人知れず市民の生活を護ってきたんだろう。

他者にそうとわからないように武装したリュウジは、今度は自分がやるのだと改めて決意を固めた。

ヴォーカルがハイトーンボイスでサビを歌いきると、曲は間奏に入りイントロと同じフレーズが再び流れ始める……。

イヤホンと竹刀袋を身につけて、ちよつと照れくさくなりながらリュウジは部室のドアを開けた。

「おやおや。リュウジはんこんにちは」

「おお、早速持って来てくれたか」  
パソコンに向かっていた綾子と紀明がこちらに顔を向けてくる。

「正式に入部をしたいという話はさつき高坂君に聞かせてもらったところだよ。ようこそ、我が心霊研究部へ」

「ほんまにうれしいわあ。よろしゅうな」

「ああ、何も知らない初心者だけどよろしくな」

「やっぱ、あつたかいな。」

いつもの校舎よりも、教室よりも、胡散臭い廊下を抜けて入るこの狭苦しい部室は安心できる。

出身とか転校生だとかいうことは関係なしに、能力や人柄を見てもらえているような気がする。

背負うものは重いけれど、それでもうまくやっていけそうな気がするのだ。

「しかし、せつかく前線に出てもらえるメンバーが増えたというのに、肝心の相手が消えてしまつとはな」

「このままなんも起こらんといいんですけど」

二人は難しい顔をしながらパソコンのディスプレイを睨んでいる。カタカタとキーボードを打つ紀明の手が異様に速い。

「どうしたんだ？」

「それがな、おとといに金剛院君とマサさんがあの部隊を殲滅して以来、あの首なし亡霊たちが市内に現れていないのだよ」

紀明は腕を組んで眉間にしわを寄せる。

「果たして彼らは完全に消滅して二度と現れなくなったのか、それとも新たな事件が起こる嵐の前の静けさなのか」

「被害者のことも調べましたけど、亡霊たちの怨念に関わっているとは到底思えないです。兵隊さんたちが何であんなことしたんかもわからん以上、次にまた何か起こる危険性は捨てきれないですよえ」

「その上ここ数日の間に市民の不安は膨れ上がっているようだな」

見ると不幸になるといふ戦国の首なし亡霊たち。

タバコ屋の主人が倒れたこととの関連を知るのはもちろん心霊研

究部の面々のみであるのだが、綾子と紀明の聞き込みによれば市民の間でも日に日に彼らの認知度が増しているという。

はじめは『不幸になる』という曖昧な言葉でしか語られなかった亡霊たちだが、その噂にもついに尾ひれがつきはじめ、具体性を帯びてきたのだ。

市内の小学生が騒ぎ立てる。

「夜中の十二時にあいつら校庭の地面から出てきて、毎晩戦ってるらしいぜ」

主婦たちの井戸端会議が盛り上がる。

「三丁目の山田さんが事故にあつた理由って、あの幽霊たちらしいわよ」

噂そのものはデマのようなのだが、確実に市民の不安を煽っている。実際の被害とも重なり、綾子も紀明も気がかりなようだ。

二人はディスプレイを覗き込んだまま動かない。

転校してすぐのリユウジの個人情報調べ上げた紀明と、リユウジにとって未知数の能力を持つ綾子。

少なくとも紀明が情報不足で困っている今、リユウジはなおさら下手に動くことができないことになる。

「すまないが、新たに情報が入るまでしばらく待機していて欲しい。携帯電話の電源だけは切らないでくれたまえ」

「……わかった」

響きを残さず小さく吐き出された言葉の後には、カタカタと鳴るキーボードの音。画面に釘付けになっている二人を背に、リュウジは部室を後にした。

「勇んで出てきたものの、活動はなしか」

澱んだ空気の漂う特別棟四階の廊下を足早に通り過ぎると、リュウジは重い足取りで長い階段を下りた。

四階から一階まで、ただでさえ長いこの道が無駄に往復と考えると全身がだるくなる。

イヤホンから飛び出す歪みをきかせたギターの音色に、階段を踏みしめる足音が混じる。リュウジは音量をぐっと上げて、再び気を晴らそうとした。

激しいハードロックの曲は気持ちを高ぶらせるも、心に溜まった重たいものはそう簡単には消えない。

気だるさは淀んだ水の居座ったダムのように横たわり、当分離れそうになかった。

ハードながらも哀愁漂うギターソロ。

その音色と旋律のギャップから連想されるのは、あの赤い巻き髪にマリンプルーの瞳だった。

「そついえばあいつ、今日は部室に来てなかったな」

情報収集は完全に綾子と紀明の領域であり、花梨も自分と同じく待機なのだろうか。それとも実家が神祇官であることを利用して、自宅で何らかのアクションを起こしているのだろうか。

古来から続く神祇官の系譜にある彼女は正義感があって頼りになるのだが、事件のことがあってか少々不安定になっているようだ。

昨日も泣き出してしまっていたわけだし、部室にいないとなると少し心配になる。

今日もひとり部屋で泣いているとかやめてくれよ、とリュウジはふと立ち止まって下を向いた。

再びこつり、こつりとコンクリートの階段が踏み鳴らされる。

特別棟もようやく一階。調理室から漂う甘い匂いに、ふとリュウジは我にかえった。

「ケーキでも焼いてんのか？　なんか腹が減ってきたな」

授業の後すぐに長い階段を上り下りしたのだ。リュウジは空腹に思わず腹に手を当てる。

「お、神田君こんなところで何してんの？」

横から聞こえてきた自分を呼ぶ声に、リュウジは音楽を止めてイヤホンをはずし、ポケットにしまった。

「お前は、日野じゃないか」

廊下の奥から日野が駆け寄ってくる。小柄な体躯は軽やかに進み、顔はどこか子供っぽく笑っていた。

「これから道場に行くところだよ。よかったら神田君もどうだい？」

「お前なあ、まだ道場を休憩所代わりにしてるのか」

上機嫌でどこか浮かれたようにも見える日野。

リュウジは神聖なる道場で今もサボリ行為を続けているのだろうかと思われたが、久しぶりに聞いた道場という響きが妙に心地よかった。

「なあ日野、そういえばお前たまになら稽古に付き合ってくれてるって言ってたよな」

「稽古？ ああいいよ。やっぱり神田君って剣道好きなんだね。しばらく体を動かしていないと、禁断症状がでるんでしょ」

「……まあ、剣道以外でいろいろと疲れてはいるんだけどな、最近」

軽く苦笑いを浮かべるリュウジに、日野は相変わらずの人懐っこい笑顔を向け続ける。

「まあまあ。神田君みたいに単純そうな人なら、きつと少し竹刀を振っただけでリフレッシュできるって」

「お前の口からまさか剣道に対して積極的な言葉が聞けるとはな  
つてお前、今さらつと失礼なこと言ったな！ 誰が単純そうな奴  
だよ」

「アハハ。僕の目の前にいる体育会系っぽい人」

「言ったな。稽古じゃ容赦しないからな」

自然とリュウジの頬の筋肉が緩み、口元がつりあがる。

二人の足は自然と道場へと向いていた。

「病院送りになっても知らないからな」

「……剣道はそういう武道じゃないでしょ。まあ、医者友達はい  
るからいいけど」

「この街で医者か。あのチャラ医者くらいしか見たことないな。あ、  
ちなみに負けたらなんかおごれよな」

「ちょっと、僕今月お小遣い厳しいんだけど」

「そうだな。どっかの食通さんが言ってたように、瓶ジュースをお  
ごって欲しいかもな」

「試合前から勝った気になっていると、思わぬミスをして負けるも  
のだよ達人さん。僕だってやるときはやるんだからね」

「そういうセリフこそ死亡フラグだつーの。あ、汗もかくし銭湯  
の風呂代と湯上りのアイスをおごるとかでもいいな」

少年たちの談笑が廊下に響き渡る。リュウジは久しぶりに高校生の男子らしい会話ができた、少しうれしくなっていた。

「腹も減ってるし、どっかのファミレスでもいいぞ」

「来週くらいになら、たつぷりお小遣いが入るんだけどね……まあいいや」

背後でひっそりと不敵に笑う日野には気付かず、リュウジは意気揚々と道場の扉を開いた。

香ばしい緑茶の香りただよふ心霊研究部室だが、リュウジが去った後も緊張の糸が張り詰めたままだった。

「うーむ、さらに本格的に噂を検証する必要があるのだろうか」

マウスとキーボードから手を離し、だいぶ年季の入ったグレーのデスクにぺたりとその手をつけながら紀明が嘆息する。

手元の湯のみが空になっているのを確認した綾子がすぐにその湯のみを取り、おかわりの準備を始める。

「しっかし、兵隊さんたちが消える前の噂が今になってでてきたんだすやるお。今調査をして出る結果はまた違うもんとちゃいます？」

湯のみに入れられた新鮮な茶葉がお湯を受けて、透明感ある緑の

お茶ができあがる。

「それもそうだな。霊的な情報はニュースなどの公式な報道にはほとんど出てこないし、口コミやネット掲示板では嘘や誤報も多い。古い情報が最新のものとして扱われるケースも珍しくはないからな」

パソコンはデスクトップのファンをフル回転させて唸りを上げるも、なかなか欲しい情報にたどり着くことができない。

お茶のおかわりを用意し終えた綾子が長い黒髪を揺らしながらデスクに戻ってくる。

「何か、噂同士に規則性でもあればええんですけどが」

窓からのぞく空は依然として暗雲に覆われている。

視界の隅に、前回の会議で使われて以来ホワイトボードに張り出されたままの地図が映った。

「規則性、か」

デスクトップはしばらくウィーンと考えるかのように回り続けていたが、やがて静かに音を止めた。

約半年ぶりに板張りの床を剣士たちが踏みしめ、本来の姿を取り戻した剣道場。

息を荒らげて竹刀を納め、リュウジと日野は一礼して試合場の外に出る。

「ありがとうございました」

道場の隅で面と籠手を外した二人が再び試合場の中心に向かい合った。

「いやあ、やっぱり神田君強いね。先輩たちがいた時代だったら一躍エース候補になっていたはずだよ」

「おいおい、有名な経津丘の剣道部員ならもつと自身持てよ。日野だって竹刀を構えりゃ別人みたいだったじゃないか」

人懐こい笑顔を浮べる日野の肩を、リュウジがポンと叩く。

「なんだかんだで、お前も剣道中毒になっていたんじゃないのか？」

「そんなまさか。どこかの剣道バカが竹刀背負ってウロウロしていたもんだからさ、ちょっと喝をいれてやるうと思っただのさ」

「喝が必要なのはお前だよサボリ魔。審判なしでやって詳しいことはわからんが、今日は引き分けてことにするか」

憎たらしく皮肉る日野をなだめるようにリュウジが提案する。廊下で会ったときからののだが、今日の日野はどこか調子に乗っているようだ。

もっとも、久々に竹刀を振ってゴキゲンなリュウジにとってはむ

しろ好都合だったのだが。

「そうだね。二人で割り勘するってことで、今日はちょっと奮発しておいしいものでも食べに行こうか」

「たくさん汗もかいたし、銭湯にも行きたい」

久々の試合の後、背中にはべっとりと胴着が張り付くほどの汗。

剣道が日常から消えた今となつては懐かしい感覚だ。

「風呂上りといえば、やっぱり瓶でコーヒー牛乳だね」

「俺はアイス派かな」

運動の後で、体の芯はまだまだ熱い。

リュウジと日野はそのまま道場の隅に正座し、正面の神棚に礼をして黙想した。

目を閉じて、リュウジは己の太刀捌き、足捌きを静かに振り返る。物音ひとつたない道場は鏡のように波立たない湖面を思わせ、心をゆっくりと静めていった。

これぐらい心が落ち着いていれば、マサももっと楽にこちらへ来られるのではないだろうか。

映し神か。リュウジはふと考える。

何気なく稽古の後にしていたこの黙禱は、実はとても神道的な行

為なのではないだろうか。

高野が授業中にした発言から宗教について思案をめぐらせたことがあったが、現代日本の神道とは不思議なもので、勧誘して信者を増やしたり絶対的に絶やしてはいけないような儀式があったりするわけではない。

米の豊作を祈るならお稲荷様、勉強運を願うなら天神様と、必要ときに好きな神様に手を合わせればいいだけである。そして複雑な儀式もお祭りや日常生活の一部として親しまれている。

自分の踏み込んだ神道の世界は案外構えることなく、すんなり受け入れられるものではないか。宗教だの信仰だのとためらう必要などないのではないか。

リュウジはどこかすがすがしい気分でまぶたを開いた。その瞬間、わずかにできた雲の切れ目から春のやわらかな日差しが瞳に飛び込んでくる。

換気のために大きく作られた窓から流れ込む春風が二人の髪を撫でていく。

身体の火照りを冷ます風についてまでも当たっていたいのを惜しみつつ、二人は残りの防具を外して更衣室へ向かうことにした。

かび臭さが鼻をつく。電気を点けてもなお薄暗い更衣室は畳四畳半より少し狭いくらいのスペースである。

壁沿いには選手用のロッカーだけでなく、古びた共用の防具や表に飾りきれなかった賞状やトロフィーが棚にびっしりと入っていた。

「どうやらこの更衣室、物置も兼ねているようだ。」

剣道の名門として知られた経津丘高校の剣道部室ということで、探せば高級な用具が出てきそうだとリュウジはワクワクした。

奥に設けられた竹刀立てにリュウジがそれまで使っていた竹刀を戻すと、日野は不思議そうに尋ねてきた。

「あれ？ 神田君自分が持ってきた竹刀は使わなかったんだ」

「ああ、これか？」

何気なくリュウジは竹刀袋を掴み、そこにはいつもとは違う薄く重い真剣の感覚が。

心臓がばくりと跳ねて、嫌な汗が首筋を舐める。

子供じみた日野の表情に急かされるように、慌ててリュウジは言葉をついだ。

「あ、ああ！ それがな、俺の竹刀ささくれて今使えねーんだ。学校のやつを勝手に借りちまったけど大丈夫かな」

剣道の竹刀は古くなると竹の繊維がむけてしまい、この繊維が相手の目に入ったりして危険なのだ。

そのため竹刀の刃部は定期的に取り替える必要がある。リュウジは真剣が入っていることを隠すために、自分の竹刀が危険な状態にあると告げた。

「本当に？ 実は神田君って宇宙人と戦うヒーローか何かで、竹刀袋に剣を入れて日夜戦っているとか」

「んなわけねーだろ！ 高校生にもなって特撮の見すぎなんじゃねーのか日野」

日野のやつは一体どこまで子供なんだ。とはいえ当たらずとも遠からず、あながち間違いでない指摘だけにリュウジはヒヤヒヤしてしまう。

「特撮は大人になっても見るものさ。まあ、その竹刀の持ち主はここに全然来ないから大丈夫だよ。それより早く着替えて、銭湯とファミレスに行こう」

後ろを向いて袴の帯をほどき始めた日野の背中を見て、リュウジはひと安心した。

心霊研究部の剣士であることは思った以上に大変で気苦労が耐えないようだ、リュウジは小さくため息をつく。

もそもそと着替え始めたリュウジを、制服に着替え終わった日野が憎たらしい笑顔で見守っていた。

ホワイトボードに貼り出された地図に描かれた円。

これは確か亡霊たちの進行方向と結界の範囲だったはずだ。鬼門の方角から、死者の穢れと呪術的な歩行で邪気を運ぶ死の順路。

戦国の亡霊たちが風水の理論を知っているのであれば、街全体の鬼門を抑えないはずがない。そう確信した紀明はマウスを手に取り、経津丘市の全体図を表示させた。

「鬼門……何かが引つかかる」

被害のあったタバコ屋は住宅地がほとんどを占める南地区の中でも少し北に位置する。

そのさらに北には学校がある。どの地区の生徒でも通いやすいように街のほぼ中心に建てられているのだ。

「高坂君。噂が起きている小学校と交差点の位置は？」

「確か、交差点は東地区にある国道どす。南北に走る大きい道と、東西に走る県道が交わっているところどすわ」

「ふむ」

東地区を南北に走る国道といえば、道沿いに多くの量販店を有す街のにぎやかなスポットであり、交通の要所である。

トラックなどの大型車の通行もありもともと事故の多い場所なのではあるが

「小学校もこの近くどすなあ。この交差点から少し東に進んだあたりどす」

「やはり東地区に集中していたか」

「やはり？」

綾子が首をかしげると、よく櫛が通された黒髪も一緒にさらりと傾く。紀明は眼鏡のズレを直すと、ディスプレイから綾子の切れ目へと視線を移した。

「そつだ。亡霊たちが移動する場合必ず通ることになるであろうからな。この街全体の鬼門を護るのはどこか思い出して欲しい」

「街全体……花梨ちゃんの家ですか？」

東地区を少し北に進んだ場所にある金剛院家。神祇省がこの場所に金剛院家を配置したのは、鬼門封じの役割を担ったことである。

「それもあるが、惜しいな。そのさらに北にある山寺、高原寺がそれにあたるのだ。そしてわたしはひとつ重要なことを忘れていた」

「重要な……もしかして」

「予想ができたかな？ 戦国時代の亡国に対する鎮魂祭を行っているのはこの高原寺なのだ。慰霊碑があるのここ。つまりはだね」

「あの兵隊さんたち、この高原寺を出発して東地区を抜けてあの南地区のタバコ屋まで行ったってことですか？」

「その可能性が最も高いだろう」

依然として厚い灰色の雲が居座り続ける窓の外に目をやり、紀明は肩の力を抜いて湯のみを傾けた。そして椅子をさげながら体全体を隣りの綾子の方へと向ける。

「さて高坂君。例の交差点と小学校のグラウンド、そして高原寺にある慰霊碑の調査を任せてもいいかな？」

「了解しました。うちに任せておくんまし」

ぬるくなっていた自分の湯のみを空にすると、綾子は身軽に立ち上がった。

リュウジにも引けを取らないその長身は非常にしなやかで、モデルというよりは新体操かフィギュアスケートの選手とでも例えた方がよさそうだ。

「高原寺周辺はおそらく亡霊たちの根城になっているはずだ。あまり危険なようであるなら無理はせず、金剛院君や神田君に声をかけるのだぞ」

「まあまあ。処置は明日にまわすとして、今日のうちに必要な情報だけ集めてきますわ」

「よろしく頼んだ。あ、たった今入った情報だが神祇省もついに動き出したようだ。未だ神託は出ず行動はできないようだが、本庁から経津丘支部に増援部隊が派遣されて次の事件に備えているらしい。これから敵もなんらかのアクションを起こすことを見越してかも知れんぞ」

「了解しました」

ドアの前で軽く上半身をひねりデスクの紀明へ小さく手を振ったあと、綾子は部室を後にした。

午後六時を過ぎた春先の気温は冷たく爽やかで、風呂上りの身体を優しく撫でていく。

薄闇が少しずつ空に降りかかっていく時刻ではあるが、東地区は車の通る音が止む気配はない。

「やっぱ盛り上がってるな、東地区は」

コンビニやパチンコ屋の派手な照明を横目に見ながら、リュウジはつくづく自分の住む南地区とは違う景色なのだと実感した。

昼間に花梨と歩いた時以上に、電気やネオンの灯る夜はそれが顕著に表れる。

「夕飯時のちょっと前だけど、お腹いっぱい食べちゃったね」

「ああ、割り勘するとなんか多めに注文しちゃったよな」

銭湯でひとつ風呂浴びてファミレスで食事をした二人は東地区をぶらついていた。

「この辺は前にちょっと通ったことしかないんだけどよ、どっか遊べそうなことか案内してもらってもいいか？」

「確かに、市内で遊べそうな場所といったらこの東地区ぐらいしかないもんね」

日野は小さく笑うと短い時間考える。

「そうだな……カラオケとウィンドーショッピングぐらいのものかな。さすがに東京ほどのことはできそうにないけど」

「なるほどな。今日は手持ちをほぼ全部メシに使ったし、また今度来ような」

「うん」

しばらく歩くと、大きな十字路に差し掛かった。車がひっきりなしに往來している。

「お、あれは」

交差点の向こうに、リュウジは見慣れた看板を発見した。本やCDを扱う中古チェーンの店である。広い国道を渡った先だ。

「なあ、俺ちょっと中古CDの掘り出し物がないか見たいんだけど」

「痛い出費して、さらに買い物する気？」

「中古市場つてのは運なんだよ。洋楽のレアものがひょっこり売りに出されてたらどうすんだ」

目を輝かせるリュウジに、日野はちょっと呆れたように肩をすくめた。

国道を勢い良く走っていたたくさんの車が、重いエンジン音を静めながら停車していく。

横断歩道の信号が、青になった。

リュウジの頭の中に歪みを効かせたギターの音色が鳴り響く。

「俺ちよつと行ってくる。先に帰ってきてくれ」

「まったく……また剣道場でね」

苦笑いで見送る日野を尻目に、リュウジは急いで横断歩道を渡った。

世間一般にはウケないが、一部のファンが熱狂する洋楽ハードロック。中古店への出入りも激しいため、リュウジはいつもチェックを欠かさないでいたのだ。

自分の好きなバンドの、まだ持っていないアルバムが店頭にあっ てくと、リュウジはワクワクしながら自動ドアへと飛び込んだ。

その時。

「痛てえ！」

「キャッ、ごめんなさい！」

黒い生地と白いフリルの段々畑が目の前から突進してきて、店の入り口でリュウジに激突した。

体にぶつかった部分はやわらかな布の感触が主だったのが幸いだが、思い切り足を踏まれてしまった。厚底の靴で踏まれたのであるう、リュウジの足先が悲鳴をあげる。

「あの、えっと……足が痛むなら病院へ行きますか？ それとも服をクリーニングに出した方がいいですか？ それとも……えっと  
神田君？」

同年代の女子の声で名前を呼ばれ、じんじんと痺れるように痛む足を見下ろしていたリュウジが顔を上げる。

そしてようやく、こちらを心配そうに見つめる相手の瞳がアーモンドのようにはっきりと見開かれていることに気付いた。

「お前、高野か？」

昨日あった倫理の授業で一緒の班だった高野の顔がそこにあった。

「高野、だよな？」

薄っぺらく黒っぽい生地をベースに白いフリフリがびっしりと飾り付けられたドレス風の衣装に包まれた身体。そこに乗った頭部は確かに高野のはずなんだが。

「そつだよ神田君。よかったあ名前覚えててもらえて」

厚底のラバーソールで器用に飛び跳ねて喜ぶ高野を目の前に、リュウジは固まってしまふ。ふわりと動くロングスカートが妙にシユールだ。

これは、あれか？ 触れてはいけないのだろうか。

リュウジがこうして混乱しているのは、転校生であるリュウジが高野を思い出すのに時間がかかっているせいだと高野は思い込んでいるように。

リュウジは高野がどうして、パーティー用の安物のメイド服にフリルを追加してちょっと豪華にしたような格好をしているのか質問するのをためらっていた。

縫い付けられたフリルのひとつが、刺繍が不完全なせいか落ちそうになっているし。

店内からこちらを見ている人々の視線。痛いというほどではないが、なんとなくこういう好奇の目で見られるのは嫌いだ。

もっとも、リュウジも半ば高野をそんな目で見つつあるのであるが。

「神田君って前の話し合いの時もちよつとボーっとしてる感じだったから、わたしのこと覚えててもらえるかどうか心配だったのよ」

授業中は思想について真面目に意見をぶつけていた彼女だという

のに、まさかこんな格好で街のにぎやかな場所を歩いていたとは。

ボーっとしてるは余計だと脳内でツッコミつつも、やはりリュウジの関心は高野が着ている服にあった。

しかしこれについてを訊くかどうかでこの後の会話の流れが左右されるだろう。

仮に高野にこんな趣味があったとして、自分自身もハードロックというあまり人に言えない趣味のためにここへ来たのだ。

ゴールデンタイムの音楽情報番組を観てもさっぱりなりリュウジには、趣味であるハードロックを興味本位にどうこう質問されて困ってしまったり、流行ガン無視の姿勢をドン引きされた経験もある。

高野に服のことを尋ねるのは、彼女にとってウザいことなのではないか。そう考えたリュウジはまったく違う方向に話を展開させることにした。

個人の趣味は尊重するべきというのがリュウジの持論なのだ。

「高野のことぐらいちゃんと覚えていたさ。家はこの近くなのか？」

「ううん。歩いて十五分くらいだから少し遠いかも。前に話した通り、うちはお寺なんだ」

「結構遠出してるとんだな。俺も南地区に家あるからわかるけど、東地区まで買出しとか遠いよな」

「そうね。わたしの家は北地区だから逆だけど、やっぱりちょっと

面倒ね。ここからちょっと北に進んだあたりよ」

東地区から北へ。そういえば北東の方角は鬼門とかいって、災いがやってくるんだっけとリュウジは思い出した。

街の鬼門に置かれた寺。リュウジの実家である東京の神田明神や、京都の延暦寺と同じようなものかとリュウジは納得した。

経津丘にも立派な鬼門封じがあるじゃないかと、リュウジは胸をなでおろす。

「そつだ。ねえ神田君」

高野の声音が少し暗くなり、笑っていた口元がすつと下がる。

「もしもよ、もしもの話なんだけどね。あなたの前に鬼が現れたらどうする?」

「俺鬼に助けてもらったことあるぞ」

リュウジがハッと気付いた時にはもう遅く、高野はすでに当たり前な反応をしていた。

「はあ?」

「いや、違うんだ! その、鬼にもいいやつだっているんじゃないかな。無闇に怖がるだけが選択肢じゃないと思うぞ。俺の勝手な妄想だけだな。ハハハ……」

ただでさえ大きな目をいっぱいに見開き、口をぽかんと開けて固

まっってしまった高野に、慌ててリュウジは言葉をまくしたてる。

寺の出身とはいえ不思議な出来事に会っているわけではないはずだ。少し前まで自分もそうだったわけだし。

鬼と武士の亡霊に助けてもらったり、式神の用意したココアを飲んだりしたなんて事実、彼女にとっては白昼夢もいいところだろう。

日野に竹刀袋の中を見られそうになったときといい、今日は嫌な汗をかく日だと心中で思いつつ、リュウジは引きつりながらも笑顔を保った。顔の筋肉がそろそろ限界だ。

「なーんだ」

高野がふつきれたように表情を消して目を細める。

「本当に鬼に会ったことがあるのなら、ぜひその話が聞きたかったんだけどな。ザンネン」

「え？」

鬼と会ったという発言に驚いたのではなかったのか。今度はリュウジが啞然とする番だった。

手を後ろに組んで高野が一步下がる。くじ引きにはずれた子供のようになく、力なく。

細められた目をしたまま、高野は淡々とリュウジに帰宅を告げた。

「わたし、そろそろ行くね。うちのお父さん最近元気がなくてさ。」

医者をやっている叔父さんが来てくれているんだけど、やっぱり調子が悪いみたい。わたしがやる家事も増えてるんだ。それじゃあね」

フリルのたつぷりと付けられたロングスカートを揺らしながら歩く彼女は、文字通り糸の切れた凧のようである。

またしても俺は、空気の読めない発言をしてしまったんじゃないか。一人残されたリュウジは彼女の寂しそうな背中を見送った。

「やっぱ俺、器用なんかじゃねえよ」

人付き合いを面倒くさがって、当たり障りのない言葉を作っただけなんだ。

取り繕って、その場だけごまかして、相手を思いやっているつもりが結局は無神経になってしまっていて、それがとんだありがた迷惑で。

「なあ、花梨よ」

不器用で、すぐに感情が爆発して泣いたり怒ったりしてしまうあいつに、俺はとんでもない誤解をさせてしまったんじゃないか。

彼女の家で励ましたことだって、ただプレッシャーを与えていただけなんじゃないか。

赤い巻き髪とマリンブルーの瞳。そして夕日の下で見せてくれたあの笑顔が、湧き上がる罪悪感の底知れぬ泥沼に沈んでいく。

せっかく訪れた中古ショップには結局入らずに、リュウジはとぼ

とぼと家路についた。

分厚い雲の切れ目から一瞬だけ月光が射したが、すぐにまた闇に閉ざされてしまった。

「高野はどうしちまったんだろう？」

ふっとロウソクの火が風に吹かれて消えてしまうように、それまで高かったテンションが一瞬にして鎮火してしまった高野。

子犬のように純粹に相手に接する彼女は、なぜいきなりあのような態度をとったのか。

のろのろと中古ショップ前を離れ歩道に戻ると、大して時間を置かず信号は青になった。

日野と別れずに一緒に帰っておけばよかったと、彼と別れた横断歩道をリュウジは渡り始める。

道幅の広い国道をまたぐ横断歩道は思いのほか長く、重い足取りで渡るリュウジの目に青い光りが点滅する。

なんか、どうでもよくなってきた。

「……なんだよ、チカチカ眩しいな」

光りはリュウジに何かを伝えようとしているのか、執拗にリュウジの目に刺激を与え続けている。顔を上げて確認すると、青信号が点滅していた。

「ま、いいかな……」

呆けた顔で赤に変わった信号機を眺めるリュウジに、待っていた車の一台が警報機を鳴らす。

それが口火を切ったのか数十台の車があげる低いエンジン音のブーイングが、リュウジを急かしているようだ。

「やべっ！」

必死にアスファルトを蹴って反対側の歩道へ走り抜ける。

バタバタとうるさく足音を響かせてようやく車道を抜けると、どこから小さな声で忍び笑う声が聞こえた。

「た、助かった。死ぬところだった」

「フフツ、ほんまにリュウジはんは、おもしろい人どすなあ」

手で口を押さえながら前かがみになって笑っているのは綾子だった。揺れる黒髪にはまとまりと芯があり、どこか瑞々しい。

「お前、どうしてここに……」

「新しく情報が入りましてな。リュウジはんもボーっとしてはる場合と違いますえ」

「情報？」

「ええ。なんでも神祇省が大事に備えて、経津丘に増援を送ったら

しいんどす」

「よかつたじゃないか」

「いえいえ。それでもまだ神託は下りておらんし、むしろこれから何かが起こる前触れとしか思えませんわ。とりあえず今はあの兵隊さんたちが通ったと思われるルートを調査してます」

「亡霊たちの？」

「部室で話した噂話の場所を辿っていくと、あのタバコ屋と街全体の鬼門にあたるお寺がつながるんどす。そのお寺には戦国時代の霊を慰める慰霊碑もあるさかい、間違いないでしょうなあ。ほんで、事故のあつた交差点というのがここ」

対岸の中古ショップのあたりを綾子が指差す。その時リュウジはハツとした。

「まさか、俺が事故に遭いそうになったのもあの亡霊たちが」

「それはリュウジはんがボーっとしてはるからどす」

白けた目つきで睨まれ、リュウジは面目ないと頭をかいてごまかした。

「まあ、今では街中に出てきてはおりませんので、この交差点にも小学校にも特に手がかりはありませんなあ。後は高原寺のある山を調べる程度やるか」

綾子は国道沿いの町並みに視線を移した。ちょうど昨日花梨の家

を訪問する時に入った路地のある方向であり、今しがた高野が帰っていった方向である。

「なあ、その調査なんだけどよ、俺も一緒に行つていいか？」

「ええ。構わんどすえ。リュウジはんの心霊研究部初活動どすなあ」  
「やわらかく微笑む綾子。」

「さつき部屋に来てくれはった時、活動がなくて寂しそうでしたからなあ。ようやくあんさんも動く時やあ」

「ああ。タバコ屋の前で決意した手前、本気でいくさ」

「何やら綾子にはいろいろと見透かされているようで。リュウジは歩き始めた綾子について北東を目指した。」

風水の要である、鬼門の方角へと。

花梨はようやく、ひとつのジレンマから開放されようとしていた。

この地の霊的な責任者である父は、何度説得しても事件解決のためには動こうとはしてくれない。神様からの神託が下りないからであ

る。

神祇官の末端の地位しか持たない修業の身である自分には何の決定権もなく、神祇省に身を置く者として時間を持て余している気分だった。

落ち着いた雰囲気を醸しだす金剛院の屋敷の中に居ながら、心にはほとんど余裕がなかったのだ。

そんな中ようやく本省が増援部隊を派遣してくれる。花梨はこの報せを受けたとき飛び上がりたほどうれしかった。

このままいけば、すぐにでも神託が下って大規模な作戦のもと経津丘を騒がせる怪事件を一気に解決できるのではないか。そう考えたからである。

以前リュウジを招いた応接室とはまた別の部屋。金剛院邸一階の大会議室では、中央から今日着く予定の特殊部隊との会談予定が入っている。

これまで地道に調査をし、自分と一緒に頑張ってくれた綾子と紀明のため。そして不甲斐なさでいっぱいだった自分を励まし、立ち直るきっかけを与えてくれたリュウジのためにも、いち早く神祇省が動く必要がある。

花梨は長テーブルの端に座る父の斜め前の席で来客を今か今かと待っていた。

「いちちらでいけません」

普段の黄色い花柄の着物ではなく、黒い余所行きの着物を着た神室姫が扉を開き、客人たちを招き入れた。

いつになく彼女は無表情で声も淡々としており、完全な無機物のようだった。

「おおー！ さっすが貴族。豪華な家に豪華な部屋してんじゃん」

神室姫に続いて、客人たちの先頭を切って入室した男は予想外の風貌をしていた。

だらしなく伸ばした金髪からちらりと覗く耳には銀のピアス。

部屋を物色するかのよういきよきよとあたりを眺め回す顔の顎はとがっていて、長身ながら猫背に蟹股で歩く姿に花梨は強烈な嫌悪感を得た。

ただでさえ派手な格好を際立たせるのは羽織ったジャケットで、アナコンダの鱗でも剥いで拵えたかのような蛇柄だった。

まるで危ない薬の売人か売れないホストのような格好である。

花梨の横にまですかずかと歩いてきたその男は、乱暴に椅子を引いてそこにどかりと腰掛ける。

「へえー。古臭い椅子だけどクッションだけは無駄にしつかりしてるな。ギシギシいう床よりかマシかな」

傍若無人な男の振る舞いに、礼儀を忘れるなど怒鳴りつけようかと口を開く花梨。

しかし自分とも面識のある神祇省の高官が続いて入室してくるのを見て慌てて口を閉じる。

扉の側で頭を下げている神室姫をねぎらつと、戦国武将のように髭をたくわえたいかつい顔つきの高官は堂々と花梨と父の前に進み出て一礼する。

花梨と父親も立ち上がって一礼した。

蛇柄ジャケットの男はその様子をヘラヘラしながら眺めているだけであった。

「まったく、お前にも困ったものだな」

高官は座ったままのだらしない男に顔をしかめていたが、やがて立ったまま咳払いをしてその男を紹介し始める。

「今回経津丘で起こっている怪事件、神託が下る前ということ調査委員をやるうと思う。彼にはすでに医者として市内を調査し、市民の健康状態が霊による邪気に脅かされていないかを調べてもらっている」

「おう、志賀だ。呪術を医学って側面から見てる。こつ見えてエリート大学の出身だぜ」

粘着質な笑みで金剛院親子にアピールする志賀。花梨は寒気を感じ、彼の隣りであるこの席から一刻も早く立ち去りたくなった。

しかしここは高官も来ている手前、みだりに席を立つことはでき

ない。

「しかめっ面すんなよ、仲良くやろっぜ」

タバコ臭い息を吹きかけながら、志賀は花梨の肩に手を当ててきた。近づけてきた男の顔の肌は荒れていて、どう見ても三十路過ぎにしか思えない。えらい若作りだ。

どうかこれが、悪い夢でありますように。

花梨はこの会議が、屈辱に耐えるものになると思いつとんざりした。

すでに太陽は沈みかけていたのだが、わずかに空に残った光さえも鬱蒼と茂る杉の木々が覆い隠していた。

高原時へと続く石段は細く、上り坂は急である。

じめじめとした空気と暗闇が、神聖な場所であれどこか不気味さを感じさせる。久々に剣道の稽古をして疲れていたリュウジは、長いこの階段がそろそろ嫌になってきた。

「おい、高坂。ちょっと早すぎねえか？」

そんな中綾子は軽快に足を運び、常にリュウジの五段ほど先を歩いていた。

「なんどすか？ 早うせんと完全に日が沈みますえ」

「制服着て、足元なんてローファー履きだろ。そんなんでよく軽々と足が動くな」

ローファーよりずっと動きやすいはずのスニーカーを履いたリュウジだが、圧倒的に綾子の方が速い。

こちらを振り返る綾子は涼しげな表情をしており、汗をたらずリュウジは慌てて石段を二段とびしながら距離を詰めた。

「んもう。そないにペースを変えたら余計に疲れますえ」

息を荒らげながら、リュウジはかろうじて綾子のすぐ後ろをキープし続ける。それから一分足らずで綾子は足を止めた。

「どうした？ 寺まではまだまだあるみたいなんだが」

「ここからが本番どす。こちらの枝道を見てくださいな」

綾子の指し示すのは、石段の上り坂から左にわかれた砂利道だった。

横に進むため傾斜は今までよりなだらかだが、路面には一切の舗装がない。

かるうじて砂利の敷き詰められた道だが、ところどころ大きな石が転がっていたり木の根がぼこりと地中から顔を覗かせていたり歩きにくそうな要素満載である。

「この先に、戦国の兵隊さんたち鎮める慰霊碑があるんどすわ。神祇省や高原寺が長年大切にしてきましたから魂さんたちも落ち着いてはると思つてましたけど、結局今回の事件が起こつてしまいました。気合入れて調べんとなあ」

「戦国時代の足軽。なのに剣を振る動きが大きく不自然で、その代わりに風水や陰陽道の知識を使って人を切り殺さず呪い殺す亡霊……か」

「そつどす。得体の知れない相手やさかい、リュウジはんも今のうちに準備をしておきい」

そう言われ、リュウジは片方の肩に掛けていた竹刀袋のストラップを袈裟懸けに掛けた。こうすれば抜け落ちることはなくなる。

「あれ？」

綾子は斜めに掛けなおされた竹刀袋を見て疑問を覚えた。

「口の方を、下にするんどすか？」

てつきり映画に出てくる忍者のように、背中から抜刀するものと思つていた綾子だったが、リュウジはまあ見てなと左腰のあたりにある竹刀袋の口にある留め金を外した。

するりと蓋になっていた部分がずれ、重力に引っ張られて刀の柄

頭が顔を覗かせる。リュウジはそのまま刀の柄を持って自分の前へ引っ張った。

竹刀ケースはそのまま半回転して地面と平行になる。

「わあ、腰に佩いたみたいやわあ」

肩に掛けたストラップは、そのまま左腰に刀を帯びるための下げ緒となったのである。

「これならいつでも刀が抜けるだろ」

言いながらポケットからイヤホンを取り出して耳に当てる。曲は流さず、スイッチをSにいれてピンチの時にはマサを呼べるようにしておいた。

綾子の方も学生鞆から二振りの短刀を取り出し、用意したベルトに差していた。長い黒髪の間隙からは小ぶりの耳掛けヘッドホンが装着されているが見える。

綾子にも、映し神がいるのだろうか。

「さあて、こっからはある意味で『異界』どすえ」

リュウジは始めて彼女に会ったときに見かけた白い小物が握られているのを見た。綾子はそのスイッチを押す。小物はパソコンのようにウイーンと音を立て始める。

「亜空、結界」

「そつどす。このオート結界石があれば、難しい印を結んで呪文を唱えんでも結界が張れるんどすわ」

呪術の世界も先端技術で楽になったもんだ。綾子は学生靴を階段に置くと、小道へと進んでいった。

「やっぱその靴のままで行くのかよ」

「これくらい序の口どす。小豆をばら撒いた道場や、ひどい時には底なし沼で訓練をしたこともあるさかい」

「そんな苦行を……高坂も花梨と同じで神祇官の家系なんだと思っただけど、貴族の末裔でもそんなことやるのか？ 明治になっても京都に居続けた旧家の令嬢だったりとか」

柔らかい物腰に京都なまり。

ある意味花梨以上にお嬢様っぽい綾子だが、リュウジの推測を聞いた綾子はおかしいとも言いたげにコロコロと笑って顔の前で手を振った。

「そんな、うちが華族やなんて。この言葉は二歳で京都に呪術の基本を習いに行かされた時に覚えたもんどす。七歳で小学校入るために戻って来て以来はこの経津丘にずっと居ります」

「二歳で呪術の修業ねえ……」

まるで江戸時代に商家へ奉公に出されるような話だ。リュウジはこのような風習が残り続ける裏の世界の奥深さを改めて理解した気がした。

しかしそれ以上に綾子が地元っ子であったことへの驚きの方が強かった。

「ちなみに、わざと動きにくい床で足捌きの訓練を受けたのはこの経津丘の実家どす」

「やっぱお前ん家も神祇官なのか？」

「うふふ、ただの私立探偵やあ。主に神祇省からの依頼を多く請け負うんやけどな」

ざくり、ざくりと砂利を踏みしめる音が鳴り続ける。

足元に注意しながら、二人は慎重に山道を進んでいった。

そういえば、綾子はパソコンの操作に優れた紀明と情報収集をしていた。

もしかすると実家が探偵であることから、綾子自身も情報を入手するパイプをいくつか持っているのかもしれない。

それどころか、本気で綾子の情報網がすごかったら最早紀明はいらないんじゃないか。

事件を解決した後、平和になった部室での紀明いじりのネタができた。

リュウジはそんなくだらないことを考えながらもそらなる疑問を綾子にぶつけた。

「私立探偵も靈的事件に関わるもんなのか？ わざわざ京都まで習得に行くのもすげえけど」

「シツ！ そろそろどす」

綾子が立ち止まって注意を促す。リュウジは以前と同じ、あの寒気を感じていた。

細い道の先に小さな広場のようなスペースがあり、その中心に石碑が見える。あれが例の慰霊碑であろう。

広場は平らに地ならしされており、砂利が敷き詰められている。

傾斜はなく足場も良いため、かなり歩くのが楽になった。

しかし広場のすぐ横はきつい上り坂。そしてその反対は崖になっている。

足をとられ落ちようようものなら、この広場に戻ってくるのは難しくなるだろう。

その石碑の周りを、薄ぼんやりと青白い光を放つ人影が漂っている。

「あー」

思わず凝視してしまいそうになるリュウジ。綾子は見てはならないとばかりにリュウジの顔を両手で動かし、視線をずらした。

「直接見たら気配ではれます。今は視界の隅で観察するんが一番」  
木々の覆う闇に焦点を合わせつつも、綾子に促されるままにリュウジは視界の隅にいる亡霊を認識しようとした。

じろじろと見ることで相手に存在を悟られてしまうことへの配慮だろうか。

慣れない方法ではあったが、少しずつ亡霊の全身が明らかになっていく。

「当世具足を着た侍。確実に戦国時代のやつだ」

足軽たちより立派な装備で、漂わせる風格も格が違う。あれが亡霊たちのボス的存在のようだ。

しかしあの亡霊、以前より違和感が少ない気がする。

「そういえば、あのお侍さん、ちゃんと頭がありますなあ」

亡霊の位置よりずれた虚空を見つめつつも、綾子の目は確実に亡霊をしっかりと見据えていた。そういえばとリュウジは納得する。

「憎い、憎いぞ……」

顔中をしわにするかのように、亡霊は顔を歪めて怒っているようだった。

「彼の者たち、許せぬ」

こめかみに血管が浮き上がったりと、霊ながら生々しく映る。

肩に担がれているのは二メートルを超える得物。長巻と呼ばれる、半分が柄で半分が刃である巨大な刀だ。

あのような武器もまた戦国時代初期の特徴である。街を騒がせる亡霊たちと同じ時代のものであることは間違いない。

じっくりと観察していたリュウジだが、集中するうちに視点の中心でがつつり亡霊を注目してしまっていたわけで。

「あ

気付いたときにはすでに、亡霊は怒りの表情をリュウジに向けてきた。

「やっべえー!」

「貴様、何者だ」

亡霊の纏う青白い光が、炎のように揺らめいた気がした。

「あかん、ばれてもった」

「すまねえ!」

謝りながら腰の太刀に手を掛けるリュウジ。

亡霊の方も殺気立っているようで、ぶつぶつと何やら呟きながら冷たい視線を放ってくる。

「眠りたい、ただ静かに眠りたいだけ」

巨大な刃を持つ長巻が構えられる。

切っ先がこちらに向けられたのを受けて、リュウジも刀を鞘走らせた。

剣先と相手の目が放つ殺気は次第に研ぎ澄まされ、試合場の中央に立った時のような緊張感がリュウジを包み込んだ。

相手は本物。強くなければ生き残れない時代に剣を振るっていた人間。

現代の武道しか知らぬリュウジは恐れを抱いていたが、それ以上に目の前の相手がどのような太刀筋を繰り出してくるのが楽しみだった。

「できるならあんたとは防具をつけて、竹刀でやり合いたかったぜ」  
それに、自分もまた本物の武士から手ほどきを受けているのだ。

握る鮫皮の感触と鋼鉄の重みはいつもと違うが、腕にはある程度の覚えがある。

リュウジはそろそろにらみ合いをやめ、刃を交えんと踏み出した。

「悪く思つなよ」

亡霊は足を高く上げる。リュウジは亡霊もまた踏み込んでくるか

と走りながら身構えたが、亡霊はニヤリと笑うと足元の砂を蹴り上げた。

「うわ！」

ざらざらと目を砂が刺激し、ただでさえ闇に覆われていた視界が完全に塞がれる。

「こんな、卑怯な方法で……」

「卑怯？ わしの時代には当たり前前の戦法でな。ま、戦場とはなんでもありよ」

「ええ。あんさんも恨みっこはなしどすえ」

「誰だあ？」

はんなりした少女の音が、どこからともなく聞こえてくる。目の前の少年は未だ目元を押さえたままで、亡霊が周囲を調べようとしたりしたその時である。

「ほんま、何でもありどすなあ」

リュウジがようやく目を開ける。

そこに飛び込んできた光景は亡霊の背後に回りこんだ綾子がそのすらりと伸びた腕で、短刀を亡霊の胴鎧の隙間に突き立てようとしているものだった。

「な、いつの間にも背後へ！」

「だから言いましたやるお。恨みっこなしやって」

まるで闇の中から溶け出てきたように浮かび上がる綾子の上半身。逆手に握られた刃が黒一色に近い世界の中で怪しく輝く。

「この、小娘が！」

「高坂！」

亡霊は懐に飛び込んだ綾子を振り払おうと、長巻を大きく横に振った。

しかし重たい刀身に引かれたか、バランスを崩し背後の崖へと片足を滑らせる。

一閃された長巻を避けようと身をよじらせた綾子も同じだった。

がくりと体勢を崩した亡霊とともに、綾子の姿も瞬時に小さくなっていく。

手を出そうとリュウジは前進するも、差し伸べた手が綾子に届く前に、彼女は勢いよく崖を滑り降りていった。

「おい、高坂！」

最後に見えた綾子の表情は意外にも、心配するなと言わんばかりにおだやかだった。

「あいつ、余裕そつな面しやがって……」

崖の下に消えていった綾子と亡霊。差し出そうとした手を空しく風が撫でているのを感じながら、リュウジは闇が支配する山中の虚空を見つめていた。

窓の外は夜になった今でもまだ雲が多く、花梨は雲のフィルターがかかってぼんやりと浮かんだ月を眺めていた。

高官が気付けば止めてくれていたのが幸いしたものの、会議の間志賀はずっと花梨にちよっかいをかけてきた。

このまま神祇省の力をもって街の不安を拭い去りたいと思っていた花梨にとっては本当に苛たましいことだった。

「本当に、悪夢と思いたいですわね」

さらには会議の内容である。

なんと本省からの指示は、このまま待機を続けるというのだ。

志賀がなんらかの情報を掴めば、それをもとに指示が下りることもなるかも知れないのだが、あのチャラチャラした医師を信用しろと言われても、それはできなかつた。

あんな男が一級の神祇官として仕事ができるなか、自分は未だ修業の身。

本当に、情けなかった。

「お、こんなところにいたのか」

痛んだ金髪を揺らして志賀がこっちに向かってくる。花梨は眉をひそめて嫌悪感をあらわにしながら、強い口調で返した。

「何か御用でしょうか？ 会議はすでに終了しておりますが」

「まあそう怖い顔すんなよ。俺はこの家を助けようと、そしてお前を幸せにしようって話をしにきたんだぞ」

「出会ったばかりのあなたと、なぜそんな話をしなければならぬのですか」

とにかくタバコ臭いから出て行ってくださいと言いたいところなのだが、相手は神祇省の人間。

それに最低限の礼儀を忘れるようではこの男と同レベルに成り下がってしまう。と、花梨は怒りを抑えた。

「知ってるぞあ。中世から続く貴族の家系に、天津神の血が混じった誉れ高い金剛院の血に、外人の血が混ざってしまったって話をよ  
う」

「な、何を」

「わかってるくせによ。お前の家は今、中央でも噂の種になってんだからな。ただでさえ伝統だの何だのにこだわるこの業界じゃあ、格好のターゲットさ」

志賀はぐにやりと顔を歪めて笑い、まわりつくような視線で花梨を見下ろしてくる。

「お前、俺と結婚しろよ」

「はあ？」

「俺みたいなエリートが居れば、お前だって安心だろう。それにお前、かわいいし」

志賀のまなざしに鳥肌が立ちながらも、花梨は突然のことに混乱し何も返事ができなかった。

志賀はいやらしい笑みを絶やさぬまましつこくこちらに目を向けてくる。

「返答は俺がこの街に居る間に頼むぜ。ま、結構長いことここに居ることになりそうだがな。その間にでも、なにかおごるし遊びに行ったりしようぜ。じゃあな」

ひよろりと伸びた後姿を呆然と見送りながら、花梨は自分の赤い髪と青い瞳を、かつてないほどに憎んだ。

春先の山にはまだ雑草も生えておらず、木々も未だ葉を茂らせてはいない。

そのため、亡霊と綾子は辛い藪に突っ込むこともなく、柔らかい腐葉土の上に着地できた。

山道を離れたこの辺りはすでに広葉樹林で、枝の間からのぞく空が街の明りを反射してうすぼんやりと辺りを照らしている。

結界の中であるため、そして昼間から街を覆っていた雲のためか、星や月は観測できない。

ぐおおと唸りながら地面を転がる亡霊から目を離すことなく、綾子は短刀を構える。

リーチの異常に長い武器を使う相手に対し、逆手に持った刃の切っ先は後。

下手に剣を突き出して間合いを示せば、すぐにあの化け物じみた刀の餌食にされるだろう。なにせ槍や薙刀と互角に戦える代物なのだから。

「い、一人前に構えなどとりおって。わしを舐めるなよ」

すらりと伸びた綾子の影に気付いたか、亡霊は立ち上がって負けじと長巻を構えた。

「あんさんには聞きたいことがたくさんありましてなあ」

怪しく揺らめく亡霊の青白さを除けば、常人の目にはこの山中の様子は何一つ映らないだろう。しかし綾子はこの場所をかなり正確に認知していた。

なにせ暗視は、彼女が京都から戻ってきてからすぐ。七歳の時点で訓練を始めていたのだから。

「フン、小娘が。お前もワシらの霊を騒がせに来たのか」

「毎年きちんと供養しているいうのに、街で暴れるんが悪いんどす」

綾子の返事が気に入らなかつたのか、亡霊は長巻を上段に持ち上げる。重い武器を振り下ろして攻撃するときの定番と言っべき構えだ。

両腕を上げたその姿は、脇腹にある鎧の隙間がよく見える。

その装甲の薄い部分に狙いを定め、綾子は間合いを詰めんと姿勢を低くして一気に踏み出す。

上からの刀に気をつけながら、短刀を躍らせんとした。

刹那。

「ぬおおー！」

亡霊は脇から回すように刀を振り、逆に下から切り上げてきた。

綾子はとっさに身を翻し、その重い一撃を避ける。

斜めに弧を描くように繰り出された太刀筋が、それまで自分の居た空間で風を切った。

「うちを誘ってはったんか。これはうかつに手は出せんなあ」

「お前のような短刀使いとは一戦交えたことがあってなあ」

とはいえ障害物の多い林の中、後退してばかりでは簡単に追い詰められるだろう。

逆に一步踏み出せばそこは長巻の間合い。言わば敵の胃袋の中である。

四歩踏み出して懐に飛び込めればようやく自分の間合い。

それをいかにして稼ぐか。

綾子が思索している間にも、亡霊は返す刀で逆袈裟に切り上げてきた。

素早く地を蹴って後退するも、すぐ後には木。次の斬撃は斜め後にかわさねば……。

綾子は木が生み出す影に身を沈めた。

「ぬぬ、小娘め。闇にまぎれたか」

綾子の姿を見失った亡霊は、ずんずんと林に分け入っていく。こ

の辺りの広葉樹はまだ若く、細い木が狭い間隔でたくさん生えていた。

少女の影を探すうちに、亡霊は大樹が倒れ、ばかりと空が開いた場所に綾子が居るのを確認する。

「なんだ。ここまで来てワシをまだ馬鹿にする気か。影に隠れるのをやめてしまおうとはな」

近づいても、彼女は動く気配がない。

「この巨大な刀を見て、ワシをのろまだと思っておったのだろう。だがさっきの斬る動作、ワシの速さはあのようなものではないぞ」

長巻の切っ先が綾子に突きつけられる。

「ワシの速さはなあ、突きにこそあるのじゃ！ 小娘などに避けられまい」

すかさず綾子は動いた。両手持ちの武器で突きを放てば、腕も身体も伸びきって隙が生まれる。

くるりと身をかわしながら、綾子は短剣を突く構えで飛び掛っていった。

「やはり、そうするかい」

亡霊は不敵に笑うと、柄を握る左腕を突き出した。

長い刀身を支える柄もまた相当の長さ。その柄を打撃武器として、

亡霊は迫り来る綾子の腹を柄で打った。

「ああっ！」

可憐な悲鳴が山中に響く。

長身ながらも細い肢体が、林に横たわった。

「おなごとはいえ、容赦はせんぞ」

短刀による奇襲を想定してか、亡霊は半歩下がって間合いを空け、それから処刑台に設置された斧のごとく長巻を振り上げた。

地に倒れた綾子目掛けて、長巻が振り下ろされる。

痛む腹に歯を食いしばりながら、綾子は体のバネを利用して瞬時に跳ね起きた。

短刀を握ったままの手で患部を押さえながら、再び林の中に走りこむ。

「逃げるのか？ それとも再び刀の振るえぬ狭い林にワシを誘い込み、突きを誘発するのか。何度やろうと、突きのあとにできる隙などワシにはないぞい」

綾子の背中を追いながら、亡霊は精神的にも綾子を追い詰めようと言葉でも迫った。

柄による打撃を浴びせたことで、明らかにあの少女は動転している。さつきよりも体の上下運動が大きく、よろめいているように見

えるからだ。

鎧をつけているとはいえ自分は亡霊。無限の体力があり、疲れることはない。

もし彼女がこちらを疲れさせようとしているのだとしても無駄なことである。むしろ向こうが消耗していくのだ。

下を向いたままの彼女はすっかり弱っているようだ。

「小娘よ、策も尽きたようじゃのう」

円を描くように逃げる綾子。同じ場所を二度も二度も逃がっている。亡霊は嫌気が差し、一度止まることにした。

「きりがないぞ、小娘よ」

「いいえ、あんさんを詰む準備は整いました」

「何？ 声に張りがあるな。まさか、下を向いていたのは弱っていたのではなく、ここの地形を……」

「ええ。ここにはうちのお友達がぎょうさんおりましてなあ」

綾子は召喚機器のスイッチを入れると量耳の耳掛けヘッドホンを外した。器用に右手で両方を持つと左手で本体のボリュームを上げていく。

ヘッドホンからは尺八のような、竹笛の音色がする。

「この音色、ワシが生きていたときに聞いたような」

「ほう、さすがうちの初代を知る時代のお人やなあ」

亡霊は記憶に合致した事柄を思い出すと、全身に鳥肌が立った。

「そ、そうだ。確かこれは武田の軍が夜襲をかけてきたときに……」

「ええ。うちの家は武田信玄はんに仕えとった忍びの家系。『裏百足衆』を率いる高坂甚内こうさか じんないの一族どす」

はんなりとした綾子のかわいらしい声とは間逆に、己の立つ大地がうずうずと気味悪く蠢いているのを亡霊は感じていた。

甲斐の武田信玄といえば、百足の旗を背にさした情報伝達部隊『百足衆』を有していたことで有名であるが、その裏には決して明るみに出さない特殊部隊があった。

それこそが、綾子の祖先である高坂甚内の率いる忍者集団、『裏百足衆』である。

「さあ、みんなあのおじちゃんが遊んでくれますえ」

綾子がヘッドホンからの笛の音色と重なるようにひゅーと口笛を吹けば、亡霊の足元がざわめき始める。

「よ、よせ！ やめるー！」

裏百足衆はただの情報部隊ではなく、独特の技能を持っていた。

人間とは相容れない。けれど妖怪とも違う生き物を飼育し、自在に操る能力。

亡霊は脛当ての裏に、小さな針のようなものがびっしりと高速で動いているのを感じた。

それはおびただしい数であり、あっという間に鎧の裏へ、首筋へ、次々に体をよじ登ってくる。

「うわあああああ！」

「ちゃあんと霊にも攻撃できるように訓練しているぞす」

正体は百足だ。百足たちは亡霊の全身を覆いつくし、今にも牙を剥かんとしている。

「うちにいろいろ教えてくれるんなら、毒までは流さないぞすえ」

「し、忍びの刃に刺され百足の毒に倒れたワシが、魂までも同じ方法に敗れるとは……」

亡霊は悶絶しながら敗北を認めた。

「おーい高坂、無事かー！」

「あら遅い」

ケータイの明りが振られているのがぼんやりと確認できる。

遠くから聞こえるリュウジの声に、綾子は肩をすくめて目を細め

た。

「よかった。突然いなくなるしあの崖を下りるのは大変だし、マジ心配したんだからな」

「うふふ。それは悪いことしました」

「お、おい小娘！　いつまでワシを放り出しておくつもりじゃあ」

足元に転がされている亡霊は丸太のように動かない。あらそういえばそうでしたと綾子は召喚機器のボリュームを下げ、口笛を短く鳴らした。

がさがさと百足の大群は亡霊を離れ、腐葉土の下へと帰っていく。

リュウジは一瞬ぞっとしたが、召喚機器を操作する綾子の姿から、この百足たちは味方なのだと悟った。

「さて白状してもらうぞ。タバコ屋の旦那さんをなぜ殺した」

「殺す、だと？　ワシらはただ静かに眠っていただけじゃ」

「おいおい、首のないお前の部下が最近街で騒ぎを起こしているのを知らねえのかよ」

リュウジの発言に、亡霊はつり上げた目を戻し、ゆっくりと開いた口をしぼめた。

「首のない者たちか。あれはワシらではない。侵略者どもじゃ」

「侵略者？」

「まさか、あの首なしは武田や北条あたりの兵士どすか？」

戦国時代に小国であった経津丘を攻め滅ぼした大国の兵士の霊。

そう考えれば、この侵略者という言葉にも納得がいく。しかし亡霊はそんな推測は違つと静かに首を振つた。

「ワシらが生きておつた頃の話ではない。奴らは今、侵略してきておるのだ」

「今だつて？」

「そうじゃ。あ奴らの鉄鎧の前にはワシらの細い刀では齒が立たん。それにあの重い剣は多くの仲間を奪つていきおつた……。あれは高原寺の仕業じゃ。あの寺はワシらを供養しているように思わせ、実際は首なしの化け物と呼び込んでおるのじゃ」

「おい、どうした」

亡霊は突然興奮し始めたのか、かつと目を見開いて熱弁する。

経津丘の鬼門封じにして高野の実家である高原寺。亡霊の言うことが正しいなら、首なしの亡霊たちがそこから現れたことになる。

「姿かたちに騙されてはいかん。奴らは足軽の姿に擬態し始めたが、ワシらが最初に見たときには見たこともない鎧と、見たこともない大きな剣を携えておつた。ありや噂に聞く、南蛮胴の具足じゃわい」

「南蛮胴で、西洋のプレートアーマーのことですか？」

プレートアーマーに大剣。これではまるで中世ヨーロッパの騎士である。

ヨーロッパから亡霊を呼び寄せてまで、高原寺は地元の亡霊を消し去りたかったのだろうかと考えるリュウジ。

しかし相変わらず情報同士に繋がりがなく、うまくまとまりそうになかった。

「赤い目の小娘じゃ……」

わなわなと震えながら、亡霊が恨みのこもった声で呟く。

「思えばあの銀の髪を生やし赤い目をした小娘がうろつくようになってから、この山は荒れ始めたのじゃ」

リュウジと綾子は怒りと悲しみを抱えたまま倒れている亡霊の言葉から、どのようにに真実を導こうかと頭を抱えた。

「本当の相手は西洋の魔物、いうことですか。こちらは一杯食わされましたな」

綾子の切れ目がいつになく冴え、黒々とした闇の向こうを見据えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1078r/>

---

神田リュウジと異界の事情～経津丘高校の日本神道～

2011年10月6日18時00分発行